基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」
二〇一四年度　第二回公開シンポジウム

『制度―人類社会の進化』（河合香吏編　京都大学学術出版会、二〇一三）をめぐって

日　時　二〇一四年一二月六日　一四時三〇分～一九時〇〇分
場　所　東京外国語大学　アジア・アフリカ言語文化研究所（ＡＡ研）
三階マルチメディアセミナー室（三〇六）

Ⅰ　開会の辞　西井凉子（ＡＡ研）　1
Ⅱ　編者による概要説明　河合香吏（ＡＡ研）　3
Ⅲ　執筆者による報告
1　霊長類社会学　黒田　末寿（滋賀県立大学名誉教授）　9
2　社会文化人類学　内堀　基光（放送大学）　17
3　理論的視座　足立　薫（京都産業大学）　25
4　生態人類学　曽我　亨（弘前大学）　32
Ⅳ　コメント
1　名和　克郎（東京大学）　41
2　山極　寿一（京都大学）　55
3　野村　雅一（国立民族学博物館名誉教授）　66
Ⅴ　討論　77
基幹研究「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」とは　83

Ⅰ　開会の辞

西井　凉子（ＡＡ研）

二人遅れているそうですので開始が遅れてしまったのですが、本日は、非常に気候の寒い中、東京からは大変辺ぴなところだというふうに皆さん多分思われているかと思うのですが、ＡＡ研までお越しいただきましてありがとうございます。

本日の会は、ＡＡ研の基幹研究（通称「人類学班」と申していますが、ＡＡ研で主に自発的に集まって研究を立ち上げるという形でやっている人類学関係の研究会です）の主宰しています研究会の公開シンポジウムです。この基幹研究はすでに第二期に入っていまして、第一期が三年、今年で二期の二年目となります。

昨年度から、合評会を行うようになりました。一つは、所外から、非常に刺激的なお仕事をされている方をお招きして、こちらで合評会をさせていただくという形があります。もう一つは、所員の書いたもの、所員の編集したものをここで、所外の先生方に来ていただき忌憚ないご意見を頂くという形で勉強させていただくという会をやっています。

今回は、非常に申し分のないコメンテーターの先生方お三方に来ていただいていますので、通常の合評会というよりも、これは大きなシンポジウムとして企画しようということになりまして、第二回目なのですが、第二回公開シンポジウムという形でやらせていただきます。対象となる本は、ここにいます河合香吏さんが編集しました『制度―人類社会の進化』というタイトルの本です。

それでは、編者の河合さんの方から内容については説明していただきます。河合さんにバ

トンタッチいたします。

Ⅱ　編者による概要説明

河合　香吏（ＡＡ研）

こんにちは。ＡＡ研の河合です。これからの司会を担当させていただきます。今日はこんなにたくさんの皆さまにお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。これから夕方六時、ちょっと始まりの時間が遅れましたので六時半ごろまでと長丁場になりますが、よろしくお付き合いくださりますよう、お願いいたします。

本日のシンポジウムは、私が編集いたしましたこの『制度―人類社会の進化』という本、以下、「本書」と呼ばせていただきますが、その合評会、今、西井さんから紹介があったような合同合評会をするというのが、基幹研究人類学班としての当初の計画だったのですが、本書が論文集でもあることから、執筆者の側からの発言者の数を増やした関係で、ちょっと大げさにというか、規模が大きくなったこともありまして、これはシンポジウム形式にした方がいいのではないかということになりました。ですから、感じとしては拡大合評会シンポジウムといったような趣になるかと思います。

本日の予定を、初めに申し上げておきます。まず前半ですが、この後すぐに私の方から、編者による概要説明ということで、本書の概要をごく簡単に紹介いたします。続いて、本書の執筆者の中から四人のメンバーの方に出ていただいて、内容についての解説をしていただきます。これは、本書の執筆陣が、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学に与する者から構成されていまして、かつ、本書の構成はそのような分け方、つまり第一部・霊長類社会、第二部・生態人類、第三部・社会文化人類というようにはなっておらず、テーマごとに

これらの学問分野が一つの部の中に共在する、いわば横割りの構成になっていることから、そうした横割りの構成に対して今日は縦割りで、霊長類社会学は滋賀県立大学名誉教授の黒田末寿さんに、生態人類学は弘前大学の曽我亨さんに、社会文化人類学は放送大学の内堀基光さんにというように分野別での解説をお願いし、最後にもうお一方に理論的視座ということで、京都産業大学の足立薫さんに本書全体についての解説を別途お願いしています。

これは、お一人一五分ぐらいずつ、約一時間ということで進めたいと思っていたのですが、生態人類学のご担当の曽我さんが、弘前大学の方なのですが、今日は青森はすごい大雪で、朝八時から飛行場で待ってくれているらしいのですが、先ほど一二時四五分に離陸したという情報を一応入れてくれておりまして、大幅に到着が遅れることになると思います。曽我さんには、ご到着次第ご参加いただくことにして、順不同になりますが、会は先に進めていきたいと思います。この時点で一度休憩を取ろうと思います。

次に後半ですが、まず三名の方々、東京大学の名和克郎さん、京都大学の山極寿一さん、国立民族学博物館名誉教授の野村雅一さんから、お一人二〇分ぐらいずつコメントを頂きたいと思っています。その後、コメントへのリプライを含めて、フロアの皆さまにも加わっていただいて、討論の時間をシンポジウム終了予定の六時ないし六時半ぐらいまで、恐らく一時間ほどになるかと思いますが、取りたいと思います。このような感じで進めていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、本書の概要に移りたいと思います。ここアジア・アフリカ言語文化研究所には共同研究課題という共同研究の組織があるのですが、本書は、そのうちの「人類社会の進化史的基盤研究（二）」というものの成果です。この一連の共同研究につきましては、話すと長くなりますのでしませんが、二〇〇五年に第一期を立ち上げまして、三年ないし四年ごとにテーマを進めて展開してきたものです。第一期は、「集団」をテーマとして、

これは成果論集として同名の『集団―人類社会の進化』という本が出ています。また、英語版で、“Groups: The Evolution of Human Sociality”というものも昨年度に刊行いたしました。「集団」に続く第二期が、本書を成果といたします「制度」をテーマとしたもので、第三期が、これは今年度三月に終了予定となっていますが、「他者」をテーマとしてきました。その後、つまり来年度からですが、第四期として、もう三年間、これはまだ始まっていないのでどうなるか分かりませんが、「生存・環境・極限」といった内容をテーマに、これまでの三期の総括も兼ねて共同研究を続けることが最近決まりましたところです。

『制度』本の話に戻ります。本書の執筆陣は、先ほど申し上げましたように、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学に与する研究者たちです。本書の内容というか、目的を一言で言えば、「制度なる社会事象について、その本源的な理解を人類社会の進化の文脈において探究しよう」とするものです。あるいは、もう少しラフな言い方をしますと、「制度の生成とはいかなる事態か」といってもよいかと思っています。こうした目的のために、われわれは制度という事象、現象の概念を、できる限り広く大きく捉えようとしてきました。

人間の生活世界では、その隅々にまでさまざまな制度が、あるときは明示的な法的規制として、あるときは半明示的な道徳律として、またあるときは、より暗黙的なコンヴェンションとして浸透しています。これらのいずれも、われわれは制度ないしその萌芽として考えようとしてきました。人類社会におけるこれらの制度は、強く言語によって媒介され、構築されていることは確かですし、通常の社会科学における制度論はそうした前提に立っていると言えます。けれども、本書の射程は、こうした通常の前提の奥にある、あるいは底にあると言ってもいいのですが、生物学的な意味での進化的な基盤にまで及ぶものです。すなわち、言語に媒介された制度ですら、その基盤には言語的に表示されていない、あるいはされ得ない、つまり人間的な言語を持たないという意味では人間以前のと言ってもよいのですが、そ

うした言語以前の原理が横たわっていることを解き明かそうとしてきました。

こうした制度的な現象、事象等が、個体間の関係を律する行動原理であって、人類以外の霊長類の社会にまで視野を広げてみて初めて理解されるような、人類社会の根幹に関わる、いわば現制度あるいはプロト制度と言ってもいいのですが、そういったものなのではないかと思います。このような部分に目を向けない限り、人類社会の進化を視野に収めた制度理解には至らないであろうということを本書の全体で考えようとしています。

これを別の言い方をしますと、次のようになるかと思います。人類は、霊長類という群居性動物の一員として、進化の過程において他者と共在する、つまり主に同種の他個体と同所的に生きるための社会的な能力、これをわれわれは「社会性（sociality）」と呼んでいますが、そうした能力を獲得してきたと言えます。それは、個が他者と共に生きていくための最も基底的な能力です。少しだけ触れますと、この社会性というものは「社会的なるもの（the social）」として、近年の社会科学ですとか社会哲学の領域で論じられている概念と、恐らくその理論的な方向性が重なっているものではないかと考えています。つまり、社会ですとか共同体の生成に関わるものだということです。本書は、いや正確には本書を成果とする「制度」をテーマとした共同研究のメンバーたちは、これをヒトとヒト以外の霊長類が共有する生物学的な、すなわち進化的な基盤を持つ特質として早くから取り扱ってきました。ヒトに独自の「社会性」の獲得は、人類という種そのものの誕生における最重要な特質と見なし得ます。この特質なくして、われわれが生きているような非常に複雑で重層的で、しばしば巨大な集団ないし社会の存在といいますか、生成はあり得なかったと思われるからです。ただ、社会性の進化は、例えば認知的あるいは心理的な機構の進化と同様に、身体的、形質的な進化のようには化石として形に残りにくい性質のものです。従って、その理論的あるいは実証的解明のためには、化石には頼り得ないのですから、現生の、つまり今現在生きているヒト

とヒト以外の霊長類の社会を対象とする研究者の共同研究による比較研究が有効な手段になるだろうと考えられます。

本書は、こうした方法論的な必然性を踏まえて、繰り返しますが、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学に与する研究者陣によって進められてきた共同研究の成果の一環です。

本書の構成について簡単に紹介しておきます。本書は、四部構成となっていまして、編者である私（河合）による序章に続いて、私を含めて一八章一八人の執筆者が論文を寄せています。

第一部は「制度の生成機序」といたしまして、制度がどのような契機に基づいて、あるいはどのようなプロセスにおいて生成したのかといった問題についての理論的、ないし実証的な論考を五本納めています。第二部は「制度表出の具体相」といたしまして、制度ですとか原制度＝プロト制度的な事象の具体的な事例が、詳細なフィールドデータによって示されています。霊長類社会、といっても全てチンパンジー社会なのですが、そこから三本、人間の社会から二本の論考によって構成されています。第三部は「制度進化の理論」といたしまして、制度の進化に関する四つのそれぞれ異なる独自性の強い―個性的なと言ってもいいのかもしれないのですが―理論化が試みられています。最後、第四部ですが、これは「制度論のひろがり」といたしまして、制度の起原と進化の理解をその理論化へ向けて、例えば「感情」といった一見制度とあまり関わりのないように思われる人間の性質をはじめとして、新たな視点から、制度の起原と進化に切り込んだ試論が四本納められています。

以上の全ての章を通して得られた理論的な到達点を簡単にまとめておきますと、次の三点に集約できるかと思います。まず第一点ですが、制度の最も原初的な形態を考えるとき、超越的な存在、神でも法でも何でもいいのですが、すなわち外在的な第三項の存在を想定する

必然性が必ずしもないということ。それから二番目ですが、法的な制度、とりわけ近代法に不可欠である刑罰の有無を制度生成の条件とする必然性はないということ。そして三番目ですが、制度の進化の過程では高いレベルで発現するコンヴェンション（因習、習律）が決定的に重要なものであるだろうということです。

以上三点から捉えたとき、制度は大型類人猿段階で既にその萌芽があらわれていると考えられ、原制度＝プロト制度の生成において人間的な言語の有無が決定要因であると考える必然性がないことを示すことができるのではないかと考えています。そして、現在のわれわれ人類もまた、不断の、これは足立さんの言い方でもあるのですが、「絶え間なく繰り返される日常的な相互行為の連続の中で」、原制度＝プロト制度から受け継ぐ慣習的な行為といいますか、いわば実践の束ねを制度の中核としながら生きているのだと考えられます。

私からの紹介は以上です。少し長く話し過ぎました。それでは、野村さんもご到着されたようですし、個別分野からの本書の紹介に移りたいと思います。初めに、霊長類社会学の分野から、滋賀県立大学名誉教授の黒田末寿さんにお願いしたいと思います。

Ⅲ　執筆者による報告

1　霊長類学

黒田　末寿（滋賀県立大学名誉教授）

黒田です。河合さんに聞いていた趣旨を勘違いしていました。霊長類関係の全体の紹介もしないといけないみたいですが、そこは考えていませんでしたので、適時、お話しさせていただきます。まず、私の原稿をまとめたもので、説明させていただきます。

河合さんの紹介にもありましたが、そもそも制度という極めて人間的な、人間社会においてのみ適用される社会的なメカニズムを霊長類の段階から考えるのはかなり無謀な試みであります。日本の霊長類社会学が出発したのは、今西錦司先生をはじめとした方々が、人間社会、人類社会の出現過程を復元する、あるいは人間性というものを霊長類との比較において明らかにしようということでありました。ですから、制度も当然、霊長類社会学の重要なターゲットであったはずです。

でも、人文関係の方はすぐに、言語がないと制度が存在しないと反論されることと思います。そして霊長類学者たちも、言語の上に制度が成立するという考え方に挑戦せず、制度について考えることを後回しにしてきました。その結果、制度の起原だとか、制度というものが他の動物にも見ることができるのかどうかといったことを考える人はほとんど出てこなかったわけです。

その中で、伊谷純一郎さんだけが制度を霊長類社会の発展の先に見ようとしていて、ごく

取っ掛かりですが、幾つかのヒントを残していかれました。それを、私自身の考えでもう少し発展させていきたいと考えたのが、今回の論文、それから今回の論文の下敷きにしました『人類進化再考―社会生成の考古学』という本です。

資料の表紙に書いているタイトル、「霊長類の社会から制度の起原をさぐる」の下に「非構造のダイナミズムを手がかりにした規則と制度への接近」という言葉を入れていますが、この趣旨はこれまでの制度研究の限界を乗り越える視点を出したいという意味です。制度はこれまで、社会秩序をつくる、社会の成員である個体と個体のコミュニケーション、交渉の不確実性を除去するために振る舞うべきこと、あるいは共通の価値体系をつくっていく、そういうものとして今まで考えられていたのですが、それだと今まで手も足も出なかったので、少し社会の秩序化、集団の構造化といったこととは違った面から制度の問題を考えてみたいということです。

この提起は、他の霊長類研究者のキータームで、先ほどの河合さんの説明にありましたソーシャリティーというこの本全体のキーと方向が少し違います。個と個の振る舞い方が構造化される、あるいは集団の枠がリジットに決められていく、そういう構造化が起こる以前の、社会的動物に内在している「他者とコンタクトする」、「他者のそばに居ることを求める」、そういうような「社交性」というか、他者を求める心性を社会が出現した出発点にすえる考え方があります。これは、今村仁司さんのサゼッションでしたが、『集団―人類社会の進化』では、そのソーシャリティーを視点にしながら、社会構造の進化を考えてきました。

今回の『制度』本で、ソーシャリティーをベースにして、チンパンジーの相互交渉が構造化されていく過程を考えているのが伊藤さん、花村さん、西江さんの三人で、霊長類の混群と生態学の立場から考えているのが足立さんです。ソーシャリティーを観察データにするには、細やかな観察力と表現力が必要になりますが、四人は、霊長類の微妙なやりとりに注意

を払い、その積み重なりの彼方に制度の芽を見いだそうとしているわけです。

しかし、私の方は『集団』でも『制度』でも、ソーシャリィティーと対極にあるもう一つの非構造、構造が解体する（反構造）コミュニタスのダイナミズムの方により注意を払ってきました。私の論文にもどって、一八章の一ページ目の図の説明をします。これは、チンパンジーやボノボの社会の中で制度の芽を見ていく際に、まず人間社会における規則や制度の現れ方、現れる場を整理したものです。ここで整理した方向でチンパンジーやボノボ、あるいはニホンザルの社会の中に同じような、あるいは類似の構造が見られるかどうかということで、霊長類社会における制度的なものの存在を検討しています。

概念図の下の説明を要約します。制度について考える際に出発点にすべきことの一つは、人間は規則や制度の中で生きているけれども、それはまさに「中」に生きていて、普段はそれを意識していないことです。これは日常では制度と慣習、あるいは制度と遺伝的な習慣行動との区別がほとんどつかないということでもあります。規則や制度に対する意識は、例えばゲームの始まりだとか何らかのイニシエーション、今日からこういうふうにするのだといった決めごとの開始、始まりとかで生じて、それに拘束されることをはっきり認識するわけですが、人間はその後それを内化して、ほとんど意識せず、規則のままに生き、いろいろな規則に従っているということを忘れてしまう。日常生活では、規則の内に棲んでいるということです。

ところが、規則遂行の失敗といったような、一般的に逸脱と呼ばれる事態、あるいは吹き出した欲望だとかが、他者にあるいは自己内に突然出現すると、主体が状況を新しい眼で見たり、みんなが逸脱に直面して「はっ」とか「ぎょっ」とする、そういうことで規則が眼前に出現し、もう一度規則を確認するといったことが出る。規則の「中」から突然意識された規則が、いわば水面上に出る。そして事態が収まると、また、規則の中に戻って生きる。そ

ういう運動を私たちは繰り返している。その運動の中に、儀礼や二次規則、それから、その規則や制度と堅く関連しています〈私たち〉という意思、そういったことがらの現れを位置づけた図です。

私の論文の大筋を「背景と基本的発想」から説明します。

まず、制度が言語以降のこととされていることについて。これは、霊長類社会学の範囲を狭めてしまう考えだったと私は思っていて、何とかして言語抜きで規則や制度の枠組みを作りたいと考えてきました。

しかし、話が前後しますが、霊長類社会学にはこうした議論以前に方法の問題があります。霊長類の社会は、人間が観察して描きあげます。そのとき、勝手に人間の一観察者が霊長類の意図や心理状態を推測して社会を描くわけにはいきません。霊長類にとってもリアルであると思われる社会像を霊長類社会学は作る必要がある。伊谷さんは霊長類社会の規矩を「価値の体系」とも言い換えていますが、私は、この用語は霊長類にとってのリアルさを求めたものと考えています。しかし、そのリアルさの保証はどこに求めたらいいのか。どうしたら人間の観察者間で納得いく形で描くことができるか。そういうことが観察上の問題としてあるわけです。

これに対しては、私が「生態的参与観察」と名付けています、詳細な観察で可能になると考えています。霊長類に感情移入をし、彼らの態度の変化、微妙な表情の変化をも読み込めるような詳細な観察ができる観察眼、それをつくるのが「生態的参与観察」なのです。もちろん、それで得た結果は、長期観察でその妥当性を検証されなくてはなりません。

それから、私たちの目標は人間社会の出現を考えているので、人間的要素をさがして、人間の方から人間以外の霊長類の社会を見ていく。サルの方から人間を見るのではありません。たとえば、人間の行為の意味は多層構造で多義的です。これをコンテクストが絞り込み、

互いに相手のことを読み合う。そういう中で行為接続の問題だとか、文脈の読み取りだとかいろいろ出てくるわけですが、そういうことを霊長類に当てはめて検討してみる。

つぎに、言語を抜いた制度の定義です。前著で書いたように、言語で規定している事柄を「期待」という言葉で置き換えると、一応規則と規範と制度を霊長類の行動にも当てはまる形で定義できる。それで霊長類の社会を考えていきます。その定義の眼目は、規則や制度は「自・他の行為の認識＝意識化」ということです。自他の行為の認識が制度の本質と考えていて、行為接続の保証問題はそこに含まれるが、その逆ではないと私は考えています。

そこから、制度は文化的に獲得されたものに限らないことになります。西江さんによると、ハイエクが制度は儀礼化とか慣習化で生じると論じていて、その中に遺伝的に支配される行動でも制度になるとしているとのことですが、私の定義でもそれは自明です。「私たちはこのように振る舞う」、あるいは「私たちがこのようにするのだ」ということで意識に上りさえすれば、何でも制度になるわけです。

次に制度と集団の関係です。まず、ある行為に関して、お互いが「あの人はこういうふうに、私のようにする、あのようにはしない」という期待を互いに及ぼす個体の集合、それが、その規則が覆う集団になる。主体の側から言うと、〈私たち〉という集団です。ゲームのような一時的な規則は、その場限りのプレイ集団にも適用されますが、制度は安定的な集団、持続的な社会の集団、ある一定の枠があり、それが長期的に安定的に続くという、そういうようなメンバーシップのある集団の全体を覆う規則が制度です。

最初に説明しましたように、規則を、実は普段、私たちは意識していない。これを「潜勢」、あるいは「潜勢化」と名付けます。しかし、どこかで意識しなければ、アリが一列で歩く行列と区別がつかなくなる。私たちは、逸脱で規則の存在に「はっ」と気が付くとか、ゲームの終了やゲームの開始時に気づく。そこで私たちは、「このようにするのだ」とか「このよ

うにしていく」と認識する。これは自己言及的なメタ認識です。ですから、規則とは行為認識の二重性ということで、行為のメタ認識を他者と共有することになる。これはベイトソンや早木さんの霊長類の遊びの議論に出てくる。

日常的に繰り返され、生活の一部になっている規則や制度は最も深く潜勢します。つまり、当たり前で、他のことはあり得ないというような形で制度となって、成員の行動を拘束する。そういうレベルの制度を、私は「自然制度」と名づけていますが、これは、言語がなくても起こり得ます。

自然制度のように当たり前になってしまうと、その中でずっと生きているわけですから、こうするものだとか、これが規則なのだ、掟なのだといったようなことを普段は考えないし、それが意識されるきっかけは、逸脱でしかないことになる。自然制度の場合は、逸脱だけが規則、制度を出現させるわけです。したがってオリジンもなく、「昔からそう決まっている」としか言いようがない。

こう整理した上で、霊長類社会学としての規則の問題に取り組みました。方法上の制約から観察できることのみで考えるということで、霊長類の場合も、もしある行為をしているとき、他者はこのようにするという期待があれば、それにそぐわなかったとき、逸脱や裏切りや失敗が生じたときに、人間の場合と同じく何らかの表情の表出や態度が見られるはずです。霊長類の行為時に逸脱と思われる事態の観察が、人間の社会における逸脱の現れと同様に規則の存在ないし現れを示すと考えるわけです。

そういう観察例として、ニホンザルの子どもの取っ組み合い遊びをとりあげ、これは規則であり、その逸脱が現れる形を始め、幾つかあげてあります。

では、霊長類社会に制度があるかという問いですが、明瞭な制度と言えるものは霊長類社会には指摘できません。それは、行為遂行集団以外の傍観者たちがその行為を行っている者

たちの逸脱に対して、特別な反応を見せることが全く観察されないからです。たとえば、チンパンジーの母と息子のインセストがあげられます。このインセストはまれで、息子が母親にインセストしようとすることはほとんどなく、たとえインセストしようとする息子がいても母親は激しく抵抗する。そういったことが観察されているのですが、それでもインセストが起こったとき、第三者がそれに否定的な反応をすることは表情でも何においても見られていない。そういうわけで、第三者が、自己が抑制する行為を他の行為遂行者たちにも期待しているとは思えないということで、制度の可能性は薄くなってしまいます。

しかし、『人類進化再考』（黒田末寿著、一九九九年、以文社）で食物分配の制度化を考察したときに用いた手法ですが、非構造的な相で考えると、持続的な集団全体が行為遂行集団にほとんど一緒になってしまうような場合があって、そこで制度の芽というか、疑似制度のようなものが見いだせる。その場合だと、他者が自己と同じことをする期待はもちろんのこと、自他間の投影と同じ効果が生じます。例えば、チンパンジーが敵対集団と対決する際の興奮状態です。そこでは恐れて後ろに後退する個体もいるのですが、心理状態では全員が行為遂行集団で、第三者の立場は事実上あり得ない「のっぴきならぬ事態」です。こういうときは、関心が収斂していますので、みんな敵対集団との場面ではあたかもかくあるべしといったような振る舞いが全員に向けられます。つまり、コミュニタスだとか一体化する非構造相（反構造相）で、〈私たち〉のアイデンティティが浮かび上がる。それが制度の基盤を作る非常に重要なことになるのではないかといったことを考えています。

レジュメにある逸脱・自由・二次規則、ここは時間がないので簡単に言いますと、最初の定義からそうでしたが、規則は実は一次元のものではなく、メタレベルの認識を含んでいる、そこに自由が生まれると言う議論で、また、実際に逸脱に対処する方法等において、その多次元性が明瞭に現れてくるということです。

最後に、戦争文化コンプレックスについて書きました。霊長類社会には、「制度」とはっきり指摘できるものはないと言いましたが、この〈私たち〉集団の全体の関心が一方向に収斂するというような事態を検討していくと、制度の可能性がより濃くなってくるといったことがあります。

チンパンジーの集団では、オスたちによるオスの嬰児殺しと共喰いが見られます。伊谷さんは、このとき起きる異様な興奮の中で、オトナオスの虎口を逃れたオスの子どもたちがオトナオスたちにアイデンティファイし、やがて彼らも大人になって子殺しのカニバリストになるといった仮説を出しています。この考えによれば、子殺しは文化ということになります。子殺しは文化であると同時に、自己再生産する文化になります。子殺しの循環は社会の構成上、オスの方を殺すので社会の構成を変えてメスより少ないオスの数を維持し、構成員の心性も文化的に変容させる。これは持続的社会集団（単位集団）全体を文化であり、制度に限りなく近い、伊谷さんは制度と言い切っていませんが、そうなります。

これについてはまだ疑問が残ります。実は子殺しは、最近ほとんど見られなくなったのです。中村（美知夫）さんに聞くと、なぜかマハレのチンパンジーは子殺しをしなくなった。そういうこともあって、果たして子殺しが伊谷さんの言うような再生産される文化であり制度的なものであると言っていいのかどうなのかは分からなくなってきていて、これも不明瞭なゾーンに戻ってしまいました。ただし、こういう非構造的（反構造的）なコミュニタスとか、全体が同一のことに関心を向けるといった事態を考察することは、他者への自己の投影とか、あるいはアイデンティティとかアイデンティファイといったことをもう少し深く捉えるきっかけになると考えています。

もう少し違った霊長類社会像を構成したい。最後はそういう希望で終わっています。だいぶ長くなってしまいましたが以上です。

（河合） どうもありがとうございました。いろいろご質問とかコメントとかおありかと思いますが、それはコメントが全部終わって以降のディスカッションの方に回すことにいたしまして、続いて、本来でしたら生態人類学の立場から曽我さんにお話ししていただくはずだったのですが、一二時四五分に飛行機が飛び立ったという情報が入っているのですが、ご到着にはまだしばらく時間がかかりますので、順序が代わってしまいますが、内堀さんの方から、文化社会人類学の立場からということで、ご紹介をお願いいたします。

2　社会文化人類学

内堀　基光（放送大学）

本来ならば曽我さんが生態人類学の方の総括をやってくれることになっていまして、そうすると、一応、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学と、普通に考えられるとこれも何となくサルに近いようなことから、サルに近い人間の在り方から、人間っぽすぎる人間の在り方へというふうにうまくいくはずですが、飛行機の都合というのはしょうがないことで、次は私が、ちょっと調子が狂うと思いますが、やります。私は河合さんの要請を正確に理解していまして、基本的にやることは人々の話で、私がどうのこうのということは話さないつもりです。

私は、パワーポイントというのはお金を取るときにしか使わないという主義でやっていたのですが、この前の人類学会（日本人類学会進化人類学分科会）につづいて――これも河合さんの使嗾ですが――ほとんど初めてパワーポイントを使います。ノートをそのままパワーポイントに移したものです。ですので、ちょっと読みにくいとは思いますが、それに基づい

て社会文化人類学系の論文、――全部でここで七つでしたか――、その諸論文がこの『制度』という本の中でどういう位置を占めるのか、どういう特色を持っているのかということを今日話すつもりです。最後に、少し時間がありましたら、私の個人的関心に引きつけて、少しその特徴的なところをピンポイント的にお話ししたいと思います。実は、私は昨日まで北海道で行われていたネアンデルタール人と現生人類の交替劇のシンポに出ていまして、ちょうどその進化という話ばかり聞いてきたものですから、その進化に引きつけて後で話すことになります。

まず、これをご覧ください。七つの文化人類学系、社会人類学系の論文が収められています。この順序は、本に書かれたとおりです。内容を細かく言うことはもちろんできませんので、私なりに一週間ネアンデルタール人のシンポを聞きながら再度読み直してみて、ちょっと簡単にノートを取ったものの一部です。私が（本書掲載論文で）やったことは、基本的に死をトピックにして、その個別契機として、他者の死と自己の死の違い、それから死者なる者の発生、それからさらにその死者の発生から死が共同性を帯びてくるということ、そしてその共同性というのが人類社会の社会生成に至るという論理展開をしたつもりです。

それから、二番目の論文は、田中雅一さんによるものです。これは、儀礼論です。どういうことを言っているかというと、これは儀礼における実践の位置付け。つまり人間はいろいろな儀礼をやるわけですが、それには儀礼に意味付けがあるとしてやっているように見えながら、実はその意味を知らずに反復的に行うことによって、さまざまなその反復性と規則性によって人間の社会の儀礼が作られている。それが、人間社会の社会性そのものの契機と同型なのではないかという指摘です。ですから、そこから儀礼実践の束、社会実践の束から社会生成を論じるという論理展開になっています。

床呂さんの論文は、制度の階梯というものを考えている。彼の言い方ですと、制度Ⅰ、制

度Ⅱといいます。制度Ⅰというのは、例えば法律であるとか、法律でなくても掟のように言語的にきちんと確定されているようなもの、それを制度Ⅰと彼は名付け、制度Ⅱがより慣習的なもの、習俗的なもの、あるいはコンベンション、中立的なものというふうに名付けています。そして、彼が、エピソードといいますか、フィリピンにおけるこの制度Ⅰと制度Ⅱが織りなす、具体的な社会においては一緒にあるわけですが、その中で基本的に制度Ⅱ、つまり習俗的なものによって多くの紛争等が調停されている、それによって平和が保たれているのだと。非常に厳しい割には、国家権力などの制度Ⅰが介在してくることはあるけれども、基本的には制度Ⅱで済んでいるということを言っています。

注で制度Ⅲということを言っています。この制度Ⅲというのが、彼によれば、先ほど黒田さんが言った自然制度のようなもの、あるいは後に語りますが――河合さんは言ったと思いますが――原制度＝プロト制度のようなものというふうにちょっと指摘しています。が、議論の展開は一切していません。

それから、次が春日さんです。春日さんの論文は、恐らくこの本の中で一番読みにくいと、多分春日さん自身は思われているのですが、私には非常に読みやすかった。すごく分かりやすい論文なのです。つまり、数学のケプラーの法則の証明法を通じて、その証明法の在り方が、あるいは証明法というか定理の措定とその定理を証明するというやり方が、実は制度の方向性と同じようなものを持っている同型であるということです。その中で、制度の進化というものを数学における諸定理の拡大というようなこととアナロジカルに論ずることができるのではないかというふうに指摘しています。そして、最後に、さまざまに展開、繰り返されたり、それから恐らく螺旋的に展開していく――これは春日さんの言葉ではありませんが、そうしたものとしての数学と同じようなものとして制度全体を考えた場合に、非常に核となる制度があるのではないか。つまり、制度の前提となる制度が自分自身であるような

制度。それを春日さんは、突如として贈与だと言い切る。今、言い張ると言いそうになったのですが、言い切ってしまう。ここの最後は論文の展開としては確かに分かりにくかったかと思います。が、これまでの春日さんのものを読まれている方はすーっと入ってくるというように、「おれを知っている人間だけが読みやすいのだ」というような論文です。そういう意味ではとても読みにくい。

それから、船曳さんのもの。船曳さんのは、ある意味で春日さんの論文とよく似ている。抽象度は同じです。ペアから第三者の存在。その第三者が介在することによって三角関係ができて、その三角関係を展開していくと立体になる。正四面体と書いていたかな。そして、その正四面体から成る――この論文を読む限りはイメージとしてはディスコのミラーボールのような感じです――あのようなもの、大きいものができると、それが全体の社会だというようなことを言っている論文です。これも、立体をイメージしながら読むと「なるほどね」と思う論文です。それで社会生成を論じるということです。

お二人、大村さんと西井さんは最後の方の部に入っているわけですが、大村さんはイヌイトの例を取って、自然や人間社会を語り、イヌイトの社会には自然制度があるのだということを言おうとしている。大村さんにとっての自然制度の理解というのは言語なしにできている制度ということぐらいなのですが、それが人間と野生動物がお互いに共生している、そうしたものとしてのイヌイトの制御システムを描き、その根底にあるのが信頼と分かち合いであると（言う）。その信頼と分かち合いというのは、基本的に言語なしで成り立つものである、一番基本であると言うことです。それを自然制度として、そこから社会生成を論じている。

それから、西井さんは、（パワーポイントには）自殺と死と書いておきましたが、基本的には自殺のエピソードを扱われている。南タイにおける自殺のエピソードを扱っていて、実

際には本当に自殺ではなかったというような言説もあるし、どうしてももう死んでしまった人間ですから、それについて、真実に関しての不確定性等々を、彼らの言説に即して解説し、最後に今村仁司さんによる死に向かう意識としての人間という議論等から、そうした人類の社会形成を論じる、社会生成を論じるという仕掛けになっています。

基本的に、文化人類学、社会人類学の論文というのは、進化を扱うときに大変困るわけです。基本的に進化の図という長いスパンで考える人はあまりいないので、われわれのプロフェッショナルな仕事としては現代を基本的に、われわれの見てきたもの、聞いてきたものをやるわけですから大変困りまして、例えば今の七個の論文でも進化という言葉が出てこない論文もあります。進化という言葉がたくさん使われている論文もあります。それはそれで構わないと私自身は思いますが、どのように進化を扱うかという困った課題に対して、基本的にはわれわれは社会生成の論理ということで対処している。その社会生成の論理をどうするかによって、人によって随分違うテーマを扱い、その論理展開も違うということになります。その、どういう点を扱ったかというのは、実はこれまでその人が何をやってきたかということにも随分よるので、必ずしも社会生成の本質に関わる必然性があったかどうかは怪しいのですが、少なくとも論文に関してはいかにも何か意味ありげに、自分がやっていることが大変社会生成のキーであるかのように語るというふうになっています。ですから、これは一人一人のものを読む（だけで正否を判断する）よりも、全部読んで、「ああ、こういうふうに見る見方もあるのだ」というふうに見たらいいのではないかと思います。

次に述べることは基本的に、実は生態人類系にも霊長類社会学系にも言え、したがって論文集自体の性格というか、研究会自体の性格なのです。「人類社会の進化史的基盤」という研究会の名の下に出てくる本、これは「人類の社会性の進化」という題にして良いとして、そうした場合、――例えば今回の『制度』の場合の方が（『集団』の場合よりも）分かりや

すいと思いますが――人類社会において制度というものをどう見ていくかという迫り方になるか、あるいは、人類の進化に関して制度がどう関わってきているのかという言い方になるのか。この二つの取りようがあるのです。ですが、基本的にこの論文集のほとんどは前者です。それは、霊長類も生態人類学も文化人類学も同じ。つまり、人類社会、人類の進化ということは、ある意味でかなり遠い背景にして、つまり遠景にしておいて、その中で制度とは何かというのを論じてしまっているのです。制度から進化を見るのではなくて、進化を背景において制度を見るという順になっている。ですから、けっこう「制度とは何か」という議論がたくさんあるのです。これがいいかどうかは別です。ただ、みんなそう理解したということだけ言っておきます。

基本的に、人類進化における制度を論じるよりも、制度そのものを考察しようとしている。でないのは、どちらかというと形式論としての船曳さんの論文。それから、議論のレベルはよく似ているのですが、個別論としての私の論文。それから、大村さんの「信頼」の論文です。それから田中さん、床呂さん、西井さんの三論文が大体中間ぐらいにあって、逆の局に行けば、また同じように形式論としての春日さんのものは、制度そのものの進化、制度がどのように進化していくのかということを論じています。

（論文集全体として）人類の進化ではなくて、制度の進化を論じているわけです。ですから、人類進化ということと制度ということの間に、どうスタンスを取るのかが、本来もっと違いがあってもしかるべきだし、あるいはもう少し収斂してもしかるべきなのだけれども、何かやや円環的に閉じた分布をなしている。それはそれで、われわれが進化の中で制度を考えるときは仕方がないのかなと思います。これは、一つには、かなり多くの人が黒田さんの（自然制度という）大思想に縛られて考えていたからだろう。だから、黒田さんが先ほど言われたようなことにとらわれて書いているから、そういう論文が多くある。

これ（このスライド）が最後です。今、私が述べてきたのは進化の問題なのですが、実は人間を考えるとき、それを通時的に考える場合には、進化と歴史という問題がある。私が思うところ――勝手に言っているので、誰も納得してくれていないのですが――、進化的な時間あるいは進化的なナラティブ構成、つまり進化のレベルにおける通時的ナラティブ構成と、人間の歴史に関する通時的なナラティブ構成は全然違う。単なるスケールの大小、時間も短い長いだけではなくて、基本的には俗に言えば、主体が何かということです。だから、主体というかサブジェクトという、いろいろな本来の意味でのサブジェクトがどのようなものであるかということによって決定的に違ってくる。

先ほどの方に少し戻りますが、『集団』のときには、集団というものを論じることによって社会性を論じていた気になっていたし、今回は制度に焦点を移すことによって何か社会性を論じるようなことになっている。意外なことに、社会性そのものにはまだ本当には手が届かないというか、社会性そのものというのはこういう個別的な側面でしか描けないのかもしれない。その辺は、私自身はまだ微妙なスタンスを持っています。いずれにしても、自己反省的には、というよりも私だけのことではないですから、仲間内の内ゲバ的には反省しています。

こうしたことは――社会文化人類学は社会生成を論じることによって進化を論じることに代替しているわけですが――、社会生成に目を向けるときにも現れるものではないか。考察対象である「われわれ」、「現在」、「今ここ」というのは、一体どの程度の幅を見ているのか。このことが随分違う。例えば、（スライドに）最後に小さく書いておきました。

自分のことを言うのは恥ずかしいからいつも小さく書くのですが――西井さんのも小さく書いて申し訳ないのですが――、七つの論文のうち、西井さんのものと私のものだけが「死」というものが入っていることによって、一応トピックが多少共通している。ただ、扱いが全

然違うわけです。西井さんは自殺だということもありますが、基本的には西井さんにとって、というか西井さんが言及した死についての考察というのは、今村仁司さんのものなのです。（言及された部分では）今村仁司さんは、死のことは自己の死としてしか基本的には捉えていないのです。あるいは「しか」ではなくて、人類にとっての大事な死は自己の死だというふうに思っているわけです。

私は、ずっと死のことばかり研究していたということもあるのですが、若いときはそう思っていたけれども、今は、自己の死というのはむしろ反転像なのだというふうに思っているわけです。そこにあるものは他者の死であって、また、他者の死も、それが単なる死一般ではなくて、「死者」という人間の形を取ったものになるということが、死の中心、死を考えるときの、特に人間社会というものが成り立っていくときの重要な観点だと思っています。そういうところから私は死を見ていったのです。

西井さんの場合には、やはり現在の南タイの人々の自殺という非常に具体的な死を描いているわけですから、自死ということもあるけれども、自分が死んでいることになるのかという、その意味では、西井さんにとっての原点は非常に現代人に近い。現代人に近いというか、まさに現代人の死である。私にとっての死というのは、今考えていることには、ネアンデルタールのこともあります。ネアンデルタール人問題にとっては埋葬と死ということがずっとまだまだ議論になっていました。北海道では隔靴掻痒的な感じを抱いてきたのです。考古学の人たちは、死者の埋葬かどうかとかそういうこと、あるいはそれに副葬品がどうあるか、それからオーナメントがどんなものがあるかというようなことに注目が行くのですが、恐らくそれだけで本当のことは分からない。わたしにとっての問題は、基本的には、目に見えないところの話なのですが、多分「死者」という具体的なイメージがあって初めてその死者の持っていた過去と、それから生きて時間を共有していたという意味での現在と、それから反

転して私も死ぬので、その私の死後の後も続いていく社会という意味での未来と将来の時間というのが、死を軸として展開していく。それが、人間の制度とは言いませんが、社会生成の中心的なところかと思っていたりします。

つまるところ、この論文集の中では、社会文化人類学の多くは、進化というものをまともに議論していない。だけど、それは実は生態人類の人も霊長類の人もそうなのです。進化を書いていた、進化について面と向かった論文は一つもないというのが自己反省です。以上で終わります。

（河合） どうもありがとうございました。まだ曽我さんがいらっしゃらないので、続けて足立さんはどこにいらっしゃいますか。

3　理論的視座

足立　薫（京都産業大学）

足立と申します。よろしくお願いします。黒田さん、内堀さんと違いまして、初対面の方がおそらく非常に多いかと思いますので、自己紹介しないといけないなと思いながら今日は参りました。曽我さんが来られたらすぐに終われるようにしたいと思うのですが、「今日は来て座っておくだけでいい」と最初言われたので。

（河合） そんなこと言っていません。

（足立） 「はい」と言って「ぜひ勉強させてください」と言って来ましたが、そうではないということでした。私に期待されている内容は何かということを全く理解せずにというか、昨日の夜になって初めて考え出して、これは大変なことになったと思ったのですが、前の三

人の方はちゃんと紹介すべき範囲が決まっているにもかかわらず、先ほど全部と言われました。「え?」という話なのですが、理論的示唆ということで、全部はないだろうと思って、何をやってもいいということだと理解して本日参りました。

簡単に自己紹介をした方がいいのではないかなと思います。河合さんの研究会には、「制度」の前の「集団」の途中のところから参加させていただいています。京都大学の理学部の大学院の時代に河合さんの後輩となりました。そのときには、チンパンジー研究の西田（利貞）さんが私の指導教官で、その後、山極（寿一）さんになるのですが、私が入ったときには伊谷純一郎さんはまだゼミにいらっしゃっていました。お茶を用意したり、たばこを吸われるので灰皿を用意したりした最後の世代ということになります。現在、京都産業大学の方に、グローバル・ヒューマン・リソース・デベロップメントという、グローバル人材育成の方でお世話になっていまして、Ecology & Societyというタイトルで、英語で日本の霊長類学を紹介する授業をやっています。

もともとはサルを見ることを頑張ってやろうと研究の世界に入りました。混群という非常に特殊なサルの群れを対象に研究を行っています。混群は異種の個体が一つの群れを作る現象で、アフリカのコートジボアールの熱帯林にこの混群を見てきました。私たちが思っている一番身近な群れがニホンザルの群れなのですが、そこから想像できる群れとはかなり違う、非常に変動性が高くて何だか曖昧なものが動いているのだけれどもやはり群れに見える。そういうものを見てしまったがゆえに、手にしている分析の道具と、見てきたものとの間の差を埋められないまま、自分が何を見てきたのかということをバランスよく処理することができずに、ひどい落第生になりまして、研究という面では混迷を深めたまま、今現在こういう状態で河合さんの方に拾っていただいきました。こちらの研究会にお世話になることによって、見てきたものと分析の道具との間をどうやってつないでいこうかという混迷を、

何とか解きほぐす糸口にちょっと立てたかなというような状態のところです。

混群では、全く色や形とかが異なったサルが一つの群れを作っています。本の中にはチンパンジーが非常によく出てくるのですが、私が対象としていくサルは知能の高いチンパンジーやゴリラやオランウータンといった大型類人猿ではありません。こういういわゆるサルと呼ばれるものを対象にしています。

理論的示唆というお題を頂きました。理論的示唆、理論というふうに、パートのタイトルで理論という形で名前が付いているのは第三部に当たるところなのです。制度進化の理論となっていまして、私の論文はここに入れていただいています。理論というからには、ここにあるのは恐らく理論っぽいやつが集まっているはずです。ちょっと理屈が先に立って難しそうでと、春日さんがいらっしゃるのですごく失礼なのですが、ちょっと変わったやつがここに入っているという感じに見えます。私も、自分の論文に関しても恐らくそういう感じなのかなと思っているのです。

ですが、『制度』の前書きを見ていただくと非常によく分かるのですが、このパート以外に関しても、前書きの中で河合さんは、理論的とか理論を展開しているとかという紹介をほとんどの章に関して記されていますので、理論といってここに限定するということでは全くないのだろうと考えています。

黒田さんのお話の中にも河合さんのお話の中にもずっと出てくるのですが、『集団』というのが前にあって、『集団』の内容を引き継いでこの『制度』本ができているということがあります。私の論文の中でもそうなのですが、非構造というところに『集団』の中で焦点が当たっていた、それを受けて『制度』の話があったというところをやはり理論的示唆ということで、お話を進めるにはどうしても外すことができないかなと思います。

非構造に関しては、黒田さんの方から詳しくお話がありました。私の対象としている混群

というのは個体の群れ構成が全然定まらない感じの群れで、順位、上下関係もあまりなくて、何となく一緒にいるという点で、非構造の例とされます。他にも非構造は、例えば鳥の混群であるとか、有蹄類、シカとかレイヨウとかそういうものが大集合を作るというようなところでも見られています。人間の場合には、ターナーが言ったコミュニタス、通過儀礼に関するコミュニタスのところが非構造に当たるのだというところは伊谷さんが詳しく紹介されました。

非構造の逆に当たるのが、構造なのですが、伊谷純一郎さんの言葉に従うと、河合さんの前書きにもありますように規矩という言葉で、その個体の社会行動を支配するきっちりと決まったルールというもの、こちらの世界が非構造とは対極にある。こういうものは、種に固有の典型的なものであって、合目的的に解釈可能な共存のルールを、個体に寄り添う形で挙げられたと整理することができるかと思います。

この非構造の方に『集団』のが焦点が当たっていって、その中で『制度』に進んでいこうという流れになるのですが、先ほどからもうだいぶ理論の話は出尽くしている感がありまして、最初に河合さんは理論的帰結としてもうまとめてくださっていますので、一体私は何をしゃべればいいのだろうという感じなのです。私の方で考えたのは、恐らく制度本の中で理論というくくりで、あるいは理論的視点で見ると三つの議論が出てくるのではないかなと思っているのです。最初は、内堀さんがもう既におっしゃいました。黒田理論です。言語なしで制度は可能かという、これは伊谷さんからの流れで、黒田さんから出されている理論です。これは、もう既に黒田さんから詳しい解説がありました。非構造に着目することで、相互行為から集団への方向性を持ってその自然制度を考えることで、言語というものを前提としない制度を、ヒトの社会とサルの社会と、霊長類の社会とで比較可能なものとして考えていこうというのは、『集団』のときの流れから自然な形で『制度』の本の中では導入されて

いるかと思います。

私は、実はこの理論にはあまり興味がない、というか、実際のところ、もう少し別の重要な理論があるのではないかなという気がしています。この『制度』本を通じて自然制度というところとはちょっと別の方向から流れてきている理論が、もう二つあるのです。その一つがやはりコンベンションだと思うのです。コンベンションの方は、多くの論文の中で相互行為の束、相互行為の繰り返しというものが、繰り返すことで慣習となる。いつもやる、みんながやるという繰り返し、これを原初的な制度の姿として措定したい。というのは、霊長類学者の方が多くこれを語っているのですが、人類学の論文の中にもこういう形の論文の運びがある。

ただ、この後につながるのは、特に人類学の方の内堀さんは社会生成とおっしゃいましたが、コンベンションの後に何か一線越えるところがあるというのが、人類学の方にはたくさん出てきます。いつもとか、みんなというものが、かっこが付いた「いつも」になる。あるいは、ある特定の「みんな」になるというところが人間の制度には特徴的であって、不可視を可視にするという河合さんのお言葉にもありますが、こういうものが霊長類にはなく、人間の方にだけあるものとして何度も繰り返しテーマとして出てくるのではないかと考えます。

もう一つの理論、三つの理論のうちの三番目です。私自身はこれが一番大事だと思っています。実はこれが進化です。今、内堀さんに進化をまともに扱わなかった、私たちはそれを反省した方がいいのか、しない方がいいのか、それをよく考えましょうという話だったのが、進化です。ヒトとヒト以前をつなぐ、その間のギャップを埋めるのだという意味の表現が、この「進化史的基盤」という言葉には表れるのですが、ここに二つの誤解を見ることができるのではないかと私自身は考えています。

二つの誤解のうち、一つは非常に簡単な誤解で、ほぼここに足を取られるということはほとんどないと私自身は考えているのですが、単一種説的な誤解と考えているものです。すごく単純に、ヒトの制度は霊長類の制度に何か足したものである。あるいは、霊長類の制度のどこかの部分を置き換えることによってヒトの制度が出来上がっているという、非常に直線的な進化観というのが可能になりますが、これをそのまま採用されている方は少なくともこの本の著者の方の中にはいらっしゃらないので、この第一の誤解に関しては読者の方がどう取られるかというのはまた別の問題ですが、著者の中でその誤解というのが取られていることはないと考えます。

もう一つの誤解です。こちらが、私にとっては恐らく深刻な誤解なのですが、もしかしたら他の方にとっては誤解ではないかもしれないということなのです。進化史的な基盤という方法に立つ場合には、いろいろな方法があり得ると思うのですが、霊長類の社会とヒトの社会を比較したときに、問題となるのは共通祖先です。系統樹を描いたときに、私たちが観察可能なのは系統樹の先にある、今現在生きている進化の最先端にいる生き物のみです。そこで進化をさかのぼってそれを考えようと真面目に考える場合には、共通祖先の性質を推定する。どの段階の共通祖先がどんな特徴を持っていたかということを推定することになるのですが、化石は動いたりしゃべったりしないので、結局それは何らかのモデルを通してそれについて考えることしかできないわけです。

そのときに私たちが取っていた方法というのは、恐らく内堀さんが指摘してくださったように、今のリアルなヒト、あるいは今のリアルなチンパンジー、あるいは今のリアルなオナガザル。ニホンカモシカを書きましたが、私は卒業研究のときにニホンカモシカを見ていたので、ニホンカモシカをここに書いてみました。を見ることによって、進化の時間というのをいったんなくして、そこに見る社会をアナロジーで語ることによって進化史的な基盤とい

うのを浮き上がらせようとする以外にないのですが、そのときに、人間の制度、ヒトの制度について考える参照項になるはずのサルあるいは大型類人猿に制度的なものがいかにして可能かということは、生活世界への位置付けができなければ本当は可能にはならないということが、進化史的な基盤というものの上で、霊長類学、人類学、生態人類学の異分野でうまく扱えたかというと、私自身としては非常に難しいところかなと思っています。

共通祖先の性質を推定することによって、制度の進化を考えるときに、推測する、推定すべき性質は、制度そのものであってもよいのかどうかということです。生物学、あるいは進化学、進化の視点でヒトとヒト以外を本当に比較したいと考えたときに、制度的なものを、生き物として生きているその世界での生物的な基盤そのものが本当は理解の対象となっていないと、制度的なものの進化を語ることはできないのではないかと考えています。

私自身は、ニッチということを制度につながるコンベンションの一つの例として挙げようとしたのですが、環境と生物主体というのが不可分にあるという自然観を取る場合に、生物学的に生き物が生きていく世界の中でどういうふうに行動を選択していくかということは、非常に制度っぽい、人間の制度っぽい形で理解される文脈が多々出てきます。それは、例えば第一部の制度の生成機序で展開されているさまざまな制度生成の多元性、あるいは北村さんの論文の中では制度への道が二つあり得ると書かれています。あるいは、杉山さんの論文は、最後のまとめのところで、「いまここ」から二つの在りようで離脱することができると書かれているのです。ということは、進化的理解の対象になるであろう制度の多元性というものを、生物学の文脈にきちんと置き直して比較するということがもう少しできるといいなというのが、私自身の反省も含めて、この本全体をもう一度読み直したときに考えたことになります。

ヒトの制度に焦点が当たっていることはもちろん間違いないのですが、ヒトの制度を進化

的に理解するといった場合に、人が持っている制度だけを対象にして、その似たものというか、劣化バージョン、ちょっと出来損ないなバージョンを霊長類の中に探し続けていても恐らく生産的なことは何もできないのではないか。ヒトの制度が、ヒトの生活社会の中に持っている意味と同じものが、例えばニホンカモシカの生きている世界の中で、ニホンカモシカにとって人が制度を必要とするのと同じぐらいに必死な思いの中で、それがないと生きていけないというようなものとして存在していることを探していくことが、進化的な基盤という意味では大事なのではないかなというふうに私自身は考えていますということです。以上です。

（河合）　どうもありがとうございました。それでは、順序がかわってしまいましたが、曽我さんが弘前から無事ご到着になりましたので、早速ですが、ご発表の方をお願いいたします。

4　生態人類学

曽我　亨（弘前大学）

弘前大学の曽我です。今日、青森が大雪のため飛行機が三時間半遅れてしまい、こんなに遅くなってしまいました。どうも申し訳ありませんでした。それと、昨日、河合さんにこのシンポジウムは「公開」と書かれているけれども、一体何人ぐらい来るのか、あと、どういう人がいらっしゃるのかと尋ねたところ、「いつも二〇名ぐらいで、所員の人が中心よ」とおっしゃって、「えっ、一般の人はいらっしゃらないの？」と聞いたら、「ほぼ来ないわ」と断言されたので、今日、私は一般の人がいらっしゃることを想定して何か配るものとか、そういうものを何も持ってきていません。大変申し訳ありませんが、先ほど「裏切り者」と小

声で言っておきましたが。

（河合） 大変申し訳ございません。

（曽我） できるだけ平たくお話ししたいと思います。

私はどういうところを担当するかというと、生態人類学の立場から何か話せと言われています。そもそも生態人類学ということ自体が、多分一般の方にはなじみがないものだと思いますので、まずそこからお話ししたいと思います。

いわゆるよく聞く人類学というのは、古いイメージになりますが、例えばお祭りを研究するとか、あるいはお葬式を研究するとか、宗教を研究するとか、そういうどちらかというと日常生活からは少し外れたことを研究するような学問だとお考えの方が多いのではないかと思います。このような人類学を文化人類学、文化に重きを置いた人類学という感じで呼んでいました。

では逆に、生態人類学というのは一体何なのかというと、ヒトが動物であるということに立脚する。人間というのも動物の一種です。そうした人間が動物としてどんなふうに生きているのかな、と。そうすると、お祭りとかお葬式とか人間はいろいろやるでしょうけれど、そういうのはとりあえずどうでもよろしい。むしろ、毎日何を食べて生きているのかなとか、そういうことを一生懸命調べる日常の学問が生態人類学ということになるわけです。

具体的にどういうことをやるかということですが、まず、生態人類学というのは、日本の中ではあまりメジャーな学問分野ではありません。今のところ、京都大学でサルとヒトを一緒に研究している連中、この人たちが一つ、生態人類学をやっています。あとは、東京大学の医学部でもう少し生理的なことをやっている人たち。この人たちは「人類生態学（Human ecology）」と逆にして名乗っています。パプア・ニューギニアに行って山奥で木を切り倒して台を作り、現地の人々を連れてきて踏み台昇降をしてもらうとか、そういうのを東大の人

は一生懸命やっている。これは本当です。他にも、私の友人は、最近うんちを必死に集めている。とにかくヒトのうんちを集めていて、その人と会うと、「ねえ、曽我君。君、アフリカに行ったら、うんち変わるだろう。そのうんち、持ってきてくれないか」とか、もうとにかく彼に会うとすぐうんちの話ばかり。真面目にいうと、これは腸内細菌の働きを調べるという最先端の研究なのですが、生理的な側面を中心にヒトのことを考える。これが東大です。

逆に、京都大学はどういうことをやっているかというと、これは、今、僕も先輩がいるので話しにくいのですが、私たち京都大学の者たちは大体こういうふうに言われています。「止まっているものは測れ」。バネばかりで測るわけです。重さを測る。「動いているものは数えろ」。とにかく一、二、三、四と一生懸命数えるわけです。ひたすら数えて、「この人はこんなに食っている」とか「この人はこんなふうにしている」というのを数えるわけです。いろいろなものが数えられます。例えば、今、この二人。近くに座っていますが、「あれ。この人、今日も一緒に座っているけれど、昨日も座っていた。一昨日も座っていた。何か二人一緒に座っている」。この座っている回数を数えるだけで仲良しかどうかが分かってしまうとか、こういうことがあるわけです。

ちなみに、チンパンジー研究の泰斗である西田利貞さんが、フィールドにいるときに、インフルエンザがはやったのですが、どのサルがまずインフルエンザにかかって、次にどいつがかかったかというのを一生懸命、記録しておられたそうです。そうすると、「あいつと仲がいいから、風邪がうつったのだ」みたいなことも分かるとか。そんな感じでやるのが生態人類学とか霊長類学です。霊長類学にもいろいろありますが、この二つは割と兄弟みたいな感じで、ヒト以外の霊長類をやるのが霊長類学。ヒトを相手にして、言葉を使って話はするけれど、あまりしゃべることばかりを信じ込まないで、むしろ何かやっていることを観察しながら考えていこう、日常を見ながら考えようというのが生態人類学ということになり

ます。

そこで、今回のこの『制度』という本なのですが、生態人類学者では、編者の河合香吏さんとはじめとして、五人が書いています。今日は、この五人がこの研究会、あるいはこの本の中でやろうとしていたことを簡単に話したいと思います。今言った五人というのは誰かといいますと、河合香吏さん、私、曽我、それから寺嶋秀明さん、それから北村光二さん、杉山祐子さん、この五人です。

さて、われわれ、生態人類学者は本書のなかではコウモリのような役割をはたしています。一方では、「人類学」の方で、社会文化人類学者と少しは関係しているわけです。その一方で、「生態」の方で霊長類学者とつながってもいる。だから、われわれはこの研究会の中では、コウモリ的に、社会文化人類学側で考える抽象的なことと、霊長類学側で考える事例に則したことを、何とかつないでいくようなことをしたいという気持ちでやってまいりました。

ただ、今回のテーマ「制度」というのは、われわれにとってものすごく難しかったです。制度というのは難しい。逆に、この前の本、この『制度』という本を成果論集とする共同研究の前にやっていた共同研究は「集団」をテーマとしたものだったのですが、「集団」なんていうのはわれわれにとってはやりやすいのです。なぜかといったら、見れば分かるから。「ああ、何か、あそこ。ごちゃっといるな。集団」、「ここもごちゃごちゃいるな。集団」という感じで、とにかく集まっていれば、見えるわけですから、「集団」なら私たちはとても得意なわけです。前の本（『集団―人類社会の進化』京都大学学術出版会）をお求めになったかどうか分かりませんが、とてもいい本ですので、ぜひお買い求めください。

では、「制度」の方はどうなのかというと、これは難しいのです。制度というのは見えないから、例えば、霊長類で制度というのは一体何なのだろう。私たち生態人類学者としてはヒトの社会の制度をサルの社会につなげて考えたい。つまり目に見えるようなことから制度

を考えていきたいわけです。では、目に見える制度というのは一体何かということで、ものすごく困ったわけです。困って、代表の河合さんに「なぜこんな題にしたのか」と怒るとか、そういうようなことも結構やりました。一生懸命考えました。

結局のところ、考えたのは、制度を考えるときであっても、やはりわれわれは見るしかないでしょう、ということです。では、何を見たらいいのかというと、それはもう一人一人のヒトが、あるいは一匹一匹のサルが、他のヒトやサルと何をやっているのか、行為のところを一生懸命見ながら制度のことを考えるしかない、こういうふうにまずは思ったわけです。

次に、制度のことを考えると言ったときに、既にある「言葉」による制度、言葉で規定されている制度、こういうのはわれわれの世界にはいくらでもあるわけですが、それはもう既にいろいろな人がずっと研究しているわけですから、そんなのはやらなくていい。われわれがやろうとしたのは、言葉による制度ではなく、制度っぽいもの、でも、制度かどうかよく分からないもの、言葉で語られないような制度です。これを、黒田末寿さんは、かつて「自然制度」というふうにお呼びになりました。「自然制度」を観察することができれば、制度についても「ああ、こんなものはどうやって進化してきたのかな」というのが少しは分かるだろうというふうに、私たちは考えたわけです。

今回のこの本の中で、私と河合香吏さんと杉山祐子さんの三人が、アフリカで調査をしていますので、アフリカの社会の中に自然制度のようなものを一生懸命探しました。同時に霊長類学者が書いた論文の中にも自然制度らしいものがないか一生懸命探しました。そして出てきたのが、例えば私の場合はこんな具合です。オスのサルがメスザルと仲良くなりたいなと思ったとします。ところが、あそこにおっかない暴力的なオスザルがいるから、びくっとして、「あ、これはまずい、まずい。全然知らないよ」というふりをする。でも、そいつが向こうを向いていたら、「チャンス」と思って寄っていく。あるいは、交尾をしているときに、

こっそり向こうの方にいる暴力的な彼を警戒しながら、声も出さないようにしてそっと交尾したりする。こういう事例がサル学の中で見つかっていましたので、私の場合は、暴力を振るう第三者の存在がまるで制度みたいだと考えたわけです。

普通、制度というと、「文」で表わされます。「右側を歩きなさい」とか文になっています。そうしたら、誰も見ていないような状況でも、その規則に従って私は右側を歩く。私の行動を止めるもの、これが制度です。では、言葉によらない制度というのはどういうのがあるのだろうか、私は暴力を振るう第三者であろうと考えました。

一方、河合香吏さんは家畜を奪いにいくときの奇妙なルールに言及しておられます。牧畜民は他民族の家畜を略奪に行く。ふつう家畜を略奪するなんていったら、私たちは、わーっと行って何か相手を殺して、家畜をわーっと奪ってくると考えます。ところが河合さんが調査している地域ではどうもそうではなくて、わーっと行って相手を脅かして、もし逃げてくれたら深追いしない。さっさと家畜を捕まえて帰ってくる。できるだけ人は殺さないで家畜を取ってくるような、ルールとして明文化されているわけではないのだけれど、何かそんなルールみたいなものがある、というお話をしておられます。

そして、最後に杉山祐子さんですが、彼女がお考えになったのは、感情です。「感情」と似た言葉に「情動」があります。情動というのは、何か心がもやもやした状態を指し、形がありません。これに対し感情は「怒り」とか「悲しみ」とか「情動」に名前がつき、その情動が何であるか認識できる状態を指し、文化的に定形化されています。

この二つの区別は重要で、感情は人に行動の指針を与えるような働きをすることがあります。例えば私の友人の娘さんが、かつて不登校だったのですが、学校にずっと行けなくて、もやもやして行けなかった。ある日、友達が文集に「〇〇ちゃん。もう学校に出ておいでよ」と書いてきたのですが、かつて彼女をいじめていた張本人の五人組の男の子が「〇〇ちゃん。

もうそんなことは忘れて、おいでよ」といけしゃあしゃあと書いてきたのです。その手紙を見た瞬間に、彼女は、がーっと怒って、そしてもう学校に行けるようになってしまったと。もやもやしている時は行動できなかったのに「怒り」と理解したとたんに行動できるようになった。これは〇〇だと名前が付いて分かることというのは、結構大事なことのようです。

ただ、こうした言い方には問題もあります。サルには言語がありませんから、感情もないことになり、行動の指針もないということになってしまいます。けれども、霊長類学者の話を聞いているとサルに感情がないとはとても思えません。この部分、私は詰めて考えきれていないのですが、情動とも感情とも言えない何か、サルにもあってヒトにもある何か、こういうようなものを手掛かりにして制度というのを考えようとしておられるのだと思います。

では、私と杉山祐子さんの話を例に取りながら、どんなふうに制度のことを考えたのかというのを、もうちょっとだけお話ししたいと思います。制度を考えるとき、それは私たちが日々の行為を行っているところとは離れたところにありそうな感じがいたします。逆のことを考えてみましょう。例えば二人の間で何かもめているときに、別に制度なんかなくても問題を解決したりすることはできるはずです。「おまえの方が悪い」と言って互いに罵りあったとしても、疲れたらやめてしまうとか、どんなふうにでもできるはずなのです。実際に私がアフリカで見たケースでは、盗みをした者を人々が裁くうちに、どんどんいろいろな言い分が出てきて、ついには盗まれた側の人間が、困っている相手に救いの手をさしのべなかったことが悪いとされてしまったことがありました。そして驚いたことに、盗まれた側に非があるという結論になってしまいました。制度がなくても、皆がこうやって折り合いをつけていくことができます。つまり「行為の中には制度はない」のです。

一方、「盗みは悪い」という制度があれば、たちどころにどちらが正しくて、どちらが間違いというのが決まります。制度は「今、ここ」から離れたところにあるのです。これを、今、

文字で「盗みは悪い」と書きましたが、これはヒトでもいいのです。例えば王様みたいに「そんなのは盗みをする方が悪いのだ」と超越的に上から言ってくる者がいたら、これも制度になってしまうでしょう。というわけで、制度というものは人々が行為しているところから離れたところに、それも何となく上の方にあるような感じがするわけです。いつこうやって上に行ったのかは分からないのだけれども、どうも制度というのは、この行為の中ではなく、行為の外にあるみたいだということです。

では、制度にまだなっていないけれども、行為の外にある制度らしい仕組みはないだろうか。私たちはこれを探しました。例えば私の場合は、暴力を振るう第三者について考えました。そして、暴力を振るう人がどんどんどんどん遠ざかって、距離的にもずっと遠ざかり、おぼろげになっていく。それが制度のような仕組みとして働いている。実際、私の調査地にはそのような仕組みがあって、ラクダの所有者がそのような暴力的第三者として働いていることがわかりました。例えば村を訪れた見知らぬ旅人。皆、この人のことをよく知らないのだけど、実はこの人は昔々自分のラクダを誰かに貸してあげて、その人がまたラクダを貸して、その人がまた誰かに貸して、その誰かがこの村人である私にラクダを貸しているなんてことがある。私が今、飼育しているラクダの所有者だったりするのです。こういうような人が突然やってきて、私のところからラクダをばーっと取ってしまうというようなことがある。時々このようなことが起きることで人々は皆、「私の飼っているラクダの所有者がいきなり来て取っていったら怖いな」と思って暮らすわけです。そうすると、あるとき旅人がふっとやってきたときに、「この旅人、誰だろう。分からないけれど、きちんともてなさないと、ひょっとしたら所有者かもしれないぞ」と思って、自分の行動を規制したりする。こういうような、水平方向にいる具体的な人が制度のように人々の行為を規制することがある。制度のような役割をラクダの貸し借りが果たしていると論文に書きました。

杉山祐子さんはどういう話だったかというと、それは感情なのです。簡単に話しますが、感情が制度のような働きをしている。例えば、ある二人の間が険悪な感じになったときに、こちらの人はこちらに対して、もし怒りを持っていたとしたら、その怒りをみんなの前で表明したりする。例えば家の中から外に向かって大声で「私は怒っている」と叫んだりするのです。そうこうすると、外にいた第三者がそういうのを聞いて、この問題に介入してくる。大声で叫ぶことによって第三者を引きずり込んでくるわけです。この二人の間だけで問題が解決しないときに、「あれが悪い」、「これが悪い」とやりあうのではなくて、大声を出して第三者を引きずり込んでくる。この引きずり込み方というのがすごく制度っぽいのではないかというふうにお考えになったようです。

生態人類学者の考えたこととしては、基本的にこんな感じです。サルが見せる暴力による他者の行為の統制や、情動・感情の働き、家畜の授受の働きなどを見ながら、制度の起原を考えました。以上が、生態人類学からの報告です。

（河合）　どうもありがとうございました。お疲れさまでした。随分時間がずれてしまったのですが、これからしばらく休憩を取りまして、この時計で四五分から再開して、まずコメンテーターのお三方からコメントを頂いて、そのまま休憩なしで総合討論の方に入っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

休憩

Ⅳ　コメント

（河合） それでは、後半を開始いたします。これから三人のコメンテーターの方々から、お一人二〇分程度ずつコメントを頂きたいと思います。初めに、東京大学東洋文化研究所の名和克郎さんにお願いしたいと思います。名和さんは、南アジア、主にネパールにおける文化人類学をご専門にしておられます。今日は、文化人類学的な立場からということで、よろしいでしょうか。コメントをよろしくお願いいたします。

1　名和　克郎（東京大学）

初めましての方が多いかと思いますが、名和と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

数年前にある京大のシンポジウムに行ったところ、何か会場からしゃべれと言われていきなりマイクを振られて、二つのことをお話ししたことを覚えています。一つは、京都の人類学は学派を形成している。第二に、京都の人類学は人類学である。東京の人類学はどちらでもない、というお話をしたのですが、その後、先ほどお話をされた曽我さんに「名和さん、一世一代のよいしょですね」と言われたことがありました。僕はよいしょではなくて、全く本音を言ったつもりでして、プラスもあるけれど、きっとマイナスもあるのかもしれないということで、単に自分の考えを言ったつもりだったのですが。ということで、今日は曽我さんによいしょと言われないように辛口でお話をするという方針にいたしますので、文句は曽我さんに、ということでお願いします。

Ⅳ　コメント

この本は、「人類社会の進化」という副題が付いた二冊目の本で、『集団』という本が先に出て、次に『制度』、この後二つ出るそうでありますが、私はこの研究会のメンバーではありませんので、完全に外側からお話しさせていただくわけです。

今、申し上げたように、この研究会の成果は、文字どおりの意味で人類学的な試みだというふうに思っておりまして、『集団』のときから拝読していました。ただ、この本では、「制度」という言葉をどう定義してどう使うかということは完全に個々の執筆者に委ねられているというところがあります。そこで、個々の論文を取り出して興味があるから読むというのではなくて、この本を全体として読むためには、「制度」という言葉を一回外して、個々の論文が実際に何をどのように論じているのかというのを確認した上で、もう一回それを全体として考えるという、かなり面倒な作業が必要となるはずなのです。ただ残念ながら私はそこまでできていないので、あらかじめおわびをしておきます。

一読した感想としては、とりわけチンパンジーに関する論文は、論理構成としてはいろいろあるのだけれども、全体としてかなりシステマチックに並んでいるという雰囲気が、素人としてはいたします。それに対して、文化人類学の論文は、抽象度もまちまちで、出てくる地域もまちまちで、議論もまちまちで、まちまちであることが悪いというふうには申しませんが、雑多感が強いという印象はありました。加えて、『集団』のときにもそうでしたが、『制度』の本においては特に、ヒト以外の霊長類の研究者の論文に比べて、ヒトの研究者の論文、とりわけ社会文化人類学者の論文において、フィールドワークによって知られた事例と、それぞれが考えるところの制度なり何なり、より理論的なところ、一般的な議論との距離が非常に離れていて、そこをえいやと飛び越えようとしているのだけれど、どうも飛び越えていないのではないかと思えるような論文が多いような気がしております。この対比は、多分第二部の制度表出の諸相というところを見ると一番よく見えるという気がいたしました。

この第二部は、最初にチンパンジーを扱った三論文が並んでいます。これは……私はしゃべっていると大体余計なことをいっぱい言いますので、余計なことを言わないように全部書いてきたのですが、書きすぎてしまって、全部読み上げると三〇分かかってしまいますので、飛ばし飛ばし行きます。存じ上げない方がいっぱいいらっしゃるのですが全部「さん」付けで呼ばせていただきます。

西江さんの論文は、アルファオスがいなくなりましたという過程、いなくなったのだろうかという過程に関するものです。それを巡る、現れた、いなくなったという長期の過程を詳細に分析していて、そこから「いつもとは異なる特殊な出会い」の場面において、何となく「なじみのあるやり方」を取りあえずやってみようという「探索的行為」が行われるというような話から議論を展開して、そこからハイエクの「自制的秩序」の話に飛んでいくという構成になっているわけです。何となくこの話を読んでいると、観察者が制度を全体的に見渡せる位置にいないという指摘も含めて、ほとんど人間社会についても同じように書けてしまうようなものに見えてしまう。何となくサーリンズが、ハワイの人々がクック船長がやってきたときに自前のものを一生懸命やりくりしてそれを迎えましたという話と似ているなということが思い出されるのですが、もちろんここでは「なじみのあるやり方」自体はここで登場するチンパンジー全員に共有されているということで、サーリンズとは違うという話になっているのだと思いますが。

次の伊藤さんの論文は、チンパンジーが集団レベル、相互行為レベルで、次の行為を選択する場面というのに注目していて、「みんな」がするであろうことを「予測」して、それに依存して行為選択を行うという場面がある一方で、具体的な出会いにおける行為選択の場面を見ると、それに方向性がなくて離合集散が非常に多いというか、離合集散がばーっと起こっている状態が基本的な状態だというような話から、先ほどから話が出ているソーシャル

という問題に話が展開していくということになっているのです。

ただ、私がよく分からなかったのは、この論文は、そこから全てのものを共存の様態における繰り返しの方にどんどん還元して、制度と共存の様態とを切り離してしまうのは錯覚だと制度側を全部切って捨ててしまっているのです。サルはそれでいいかもしれないけれど、それで人間社会の制度を全面的に説明出来るのかという疑問はありました。最後は制度が独り歩きしている世界は息苦しい社会であるみたいなことを書いてあるのですが、そういう言い方をしているということは、「制度が独り歩きしている世界」があるということを本人が認めているということになるので、議論として何か人間社会とサルの話をがっと直結した形で書くのはちょっと危ないのかなという気が、個人的にはしました。この二つの論文を読んでいて、僕はチンパンジーについてほとんど何も知らないこともあってチンパンジーについて非常に多くを学んだ一方で、人間を議論する際に、チンパンジーとの差異がほとんど見えない議論になっているように見えて、それは私が何も知らないからなのだろうと思いますが、ふっと疑問に思いました。

次に、花村さんの論文です。これは、チンパンジーが発する長距離発声に注目するという話になっているわけですが、チンパンジーの論文はとにかく知らないことばかりで、これも大変面白く読みました。細かい言葉遣いに関するものなのでコメントは省略いたします（附記：省略したコメントは、「「日本人にとって、「おじぎをし合う」というパターンを利用した相互行為は、誰にとってもいつでも「挨拶」を意味する」というのは、不明確であり、かつ恐らく間違っている」というものです）。

これら三つの論文を読んでいくと、チンパンジーの、「制度」とは申しませんが、ある種の社会のようなものの諸相が見えてくるという感じがするわけなのです。そこで、足立さんの論文の話が次にありますが、ちょっとその前に、今、第二部の話をしていますので、まず

目次に沿ってお話します。

第二部はその後に二つの論文があって、いずれも人間の話です。最初に、床呂さんは今日いらっしゃっていないですよね。いないところで人の批判を言うのはどうかと思うのであれなのですが、床呂さんの「野生の平和構築」という論文は、スールー海域世界というフィリピンの南の方の地域における海賊とか暴力がまん延する海域世界の中にあって、いかにしてサマ人は平和の民として知られるような状況を可能にしているのだろうかというので、私は大変期待いたしまして、これはきっとサマ人対多民族集団の紛争解決の分析なのではないかと思ったところ、全然そうではなくて、なぜか議論はサマ人社会内部の紛争解決に収斂していって、しかも民族内の紛争解決でとりわけ象徴的回路を用いた紛争解決に話が収斂していくのです。それだけであれば、何か社会人類学が過去八〇年延々やってきたことと何も変わらないような気がする。

それから、先ほど内堀先生は大変好意的に要約されましたが、制度Ⅰ、制度Ⅱという議論で、制度の近代主義的理解というものと、「フォーマルな」制度というのをかなり重ねあわせて論じてしまっている。その二つは厳密に分けなければいけないと思うのですが、それが重なっていて、何かそこで張り子の虎みたいなものが立てられて、フォーマルで近代的な制度だけが制度だと思っている人が多いだろうけれども、それは間違いであるという話になっている。そんなことを信じている人はきっと誰もいないと思うのですが、そういうことが書いてあって、何かこれはあまりよろしくないのではないかと思ったのですが、しかしこの論文がこの論集に収録されていて、しかも他の何人かの方々が床呂さんの論文を論集の中で引用し言及しているということは、きっと私が読み込めていない画期的な意義があるはずだと思いますので、ご本人にお聞きしようと思ったのですが、いらっしゃらないので、河合さんからご説明していいただけるものと信じています。

Ⅳ　コメント

次に、河合さんのレイディングの論文が、これはとても面白くてというか、この論集は面白い論文ばかりなのですが、儀礼的な、要するに先ほど曽我さんが説明された牛を取ってくるという話ですが、それが非常に、一種儀礼的なやり方をしていると。そこに、なぜレイディングをやるのかというと、牛を取り返すのではなくて、単純に取られた牛はもう向こうのものになって関係なくなってしまっているので、牛をどんどん増やしていくのだというような話が結び付いていて、非常に面白いのですが、最後の文を見てずっこけました。「ウシの価値とレイディングをめぐる議論は、こうしてチンパンジー属二種にみられる食物分配と遠い過去に溯って繋がり、進化（進化史的基盤）の問題として考えることができるのだと信じたい」という、論集の編者としては非常に投げやりな最後の一文があって、私は揶揄しているわけではなくて、その信念はきっと間違っていないのかと思うのですが、ただそれをやる前に、例えば河合さんの議論だと「超共同体的牧畜価値共有集合」なるものが設定されていて、いろいろとドドスと周りの民族と同じような規範が共有されているという話だと思うのですが、それが、完全に閉じた集合としてあるのか、それとも、ずっとはるか向こうの方に行けばもっと何か取りあえず人を殺すことに価値を見出すような過激なレイディングをやる人たちがいるわけで、そこまでが連続的につながっていて、どこを中心に見るかによってだんだんだんだん論点がずれていくようなものの一部を切り取ると、ここで言われている「超共同体的牧畜価値共有集合」というふうに見えるのか、ということを考えつつ、いわば東アフリカから北東アフリカの牧畜民のレイディングと牛に関する比較研究と理論化みたいなことをやってからその先に行かないと、多分ドドスの例だけから一般論にぽんと飛ぶことは絶対無理なような、ただ先ほどはニホンカモシカとつなげてもいいという話でしたから、絶対無理ではないのかもしれませんが、何か厳しいかなという気がいたしました。

つぎに、私のメモにはＡＡ研つながりで西井さんのことが書いてありますので西井さんの

方に行きます。南タイの村における老女の自殺という話なのですが、この論文は、西井さんの論文はいつもそうなのですが、非常に民族誌的に詳細で面白くていろいろな話が聞けるのですが、先ほど内堀先生もおっしゃっていたかと思いますが、「死」と「死のふり」を巡る今村先生の議論にそれを結び付けようとしていて、それから全部論じてしまっている。ところが私は、今村先生の、「自死」が「身体を否定する意識」であるという出発点自体が、社会についての一つの仮説的な原理的説明を導くために取りあえず置いておくというのだったらいいのかもしれないけれども、具体的な自死、個別の自死を巡る民族誌的な事例にそれを持ってきて、それで論じてしまうと、何か民族誌のいいところがみんな吹っ飛んでしまうようなものではないか、よほどそれに妥当するような例が出ているのだったらともかく、という気がいたしました。

西井さん自身は、「時が至れば死ぬ」という人々の語りに行きついていて、それを生者が死者を受容していく過程であって、死から生の関係性へとその受容をつなぐ過程でもあるというふうに言っているのだけれども、最後に、そうした受容をベースとして人々は他者と共に生きる工夫として制度を生み出しているという、何かこれは絶対いきなりここには飛べないでしょうという議論で終わっていて、これを語るのだったら内堀先生並みの理論構成が間にないとまずいのではないかという気がしました。

生態人類学の方もこの調子でやっていると途中で終わってしまいますが、杉山さんの論文は感情に関する論文なのですが、ただ、「感情という制度」が集団内の葛藤に対処するだけではなくて、その制度を利用して新たな凝集性を生み出すことも可能にしていて、集団の創出のための資源を作り出しているという議論は、ある意味説得的なのだけれども、非常に機能主義的というか、予定調和的に全て集団の場に回収されていくような議論になっていて、せっかくの感情の議論に直面から切り込む可能性を持っている民族誌の細部と道具立てが十

分に生かされない結論なのではないかなという気がいたしました。

大村さんはいらっしゃらないので、どうしましょうか。大村さんの論文は、イヌイトの生業システムの議論と、それから拡大家族集団内部の人間関係の話があって、イヌイトの生業システムというのは、人間関係に関しても、野生生物に関しても、自分が優位な立場からの強要や命令をするということを禁じていて、対等な信頼関係が人々の間に生まれてくる。それが、動物からの命令といういわば象徴的な言語的な規範なしに成立するかどうか、黒田先生が言われている自然制度の問題として立てられるかというところが議論されているわけです。イヌイトの話は大変美しくていいのですが、イヌイトの人たちは子どもを徹底的に甘やかして、それを通じて感情と欲求を他者との共在に向けることで、その共在を巡る自然制度が成立しているというのが彼の論なのですが、これはイヌイトはそうなのかもしれないけれども、全ての採集狩猟民がそのように子どもを甘やかして過ごしているのだろうかという民族誌的な疑問が湧くし、全ての人間がそうしているかというと、確実にそうはしていないということがありますので、彼が話をイヌイトから一般に拡大していく部分は怖いなと思いました。

以上いずれの論文も民族誌的に非常に面白くていろいろ勉強になりました。しかも、それが制度一般に関する議論につながっているだろうなという予感があって、例えば情動とか感情とか死というような、いわば人間、人類諸社会において恐らく常に既にある部分が制度化されているのだけれども、しかし制度の側に恐らく十分に回収し尽くせない事象を具体的に取り上げているので、展開の可能性は大いにあると思うのです。ただ、民族誌的な面白さと、一応進化史的基盤を視野に入れた、かぎかっこが付いているところの「制度」一般の議論との距離との大きさがあるので、これ以上これを積み上げていくだけで先に進めるのだろうかという疑問が涌きます。もう少し主題を区切ったり地域を区切ったりして比較とか理論的検

討をやった方が、本当に制度の問題をこれ以上考えるのだったら、いいのかなという気がいたしました。次の『他者』に行ってしまうらしいですが。

曽我さんの論文、先ほどご自身が最後の部分だけご紹介されましたが、これは、短いけれど大論文でして、ニホンザル、アカゲザルと人類のさまざまなタイプの社会を比較しながら、一方でダンバー数という、これ以上の人数になると個体を安定的に記憶しきれなくなる数の問題を出して、その上で、だからブッシュマンとかピグミーとか極めて規模の小さい社会においては対面的な分かち合いだけで、いわば制度みたいなものはあまり必要ない、それ以上になったときにどうするかということで、先ほど曽我さんがおっしゃったように、制度のようなものを一生懸命探してくる。それがガバラにおけるラクダを他人のものを他人に信託して、信託して信託して誰のものか分からなくなっているという状態だという話だと思うのです。これは大変魅力的な仮説だと思います。曽我さんへの批判は、実は後ろの方に書いてあって、ここに書いてありませんでしたので、後ほど。

サルとか生態の話を私が一生懸命やるとぼろが出ますので、田中さんの儀礼論に飛びます。田中雅一先生は、「複合的な規範」であるところの制度が正当化されるのは「儀礼行動」を通じてであると言う仮説に基づいて、儀礼研究を、意味の方ではなくて、行為の形式性に注目する形でレビューしています。個々の、彼がレビューしているベルとかハンフリーとかの議論には僕は言いたいことはいっぱいあるのですが、それをここで話しても致し方がないので飛ばします。が、ただ、この論集を全体として見ると、田中先生が言っている動物のディスプレイに関する議論については、チンパンジーについて本当に田中先生の言っていることに収まりきるのかなということは疑問に思います。これは、霊長類をやられている方がコメントされるべきことかと思いますが。

それから、田中先生は既に制度が遍在している状況の中での制度を論じていて、田中先生

が扱っている儀礼の話というのは、既に制度がある中で制度を正当化する論理にしか過ぎないので、それを進化史的な起源の問題と直結、彼は直結させているとは言いませんが、その問題と進化史的起源の問題とはやはり別に考えた方が安全だと思います。

私は、数学はできないので、内堀先生と違って春日先生の論文が理解できずに終わってしまいました。まず数学の証明というよりは、何か力学の数学的証明ではないかとかくだらないことを考えて、出発点で立ち止まってしまって、結局、もう一回読んだらきっと分かるかもしれませんが、今のところ十分に分かっていません。中間のまとめみたいなところがあって、そこは数学が再帰的にして反復的に秩序を形成することで絶えざる自己組織化を果たして進化を遂げるという形で結ばれているのですが、何かこれは一方でストラザーンが論じていたフラクタルみたいな話が想像されて、もう一方でルーマンの社会システム論みたいなものがぼけっと浮かぶのですが。この論文が何かストラザーンの論文よりも私にとって難しいのは、数学ができないということが九五％かもしれないのですが、ストラザーンが使っているアナロジーというのは常にごくごく具体的で観察可能な物事から出発してアナロジーを立てているのだけれど、これは数学が分からないというのは私のせいだとして、社会の方も社会、制度の方も制度一般みたいなもので、もちろん先ほど言われたように贈与というものが最後にぽんと出てくるのですが、それがあるので、私にはかなり厳しかったのかなという気がいたしました。もう一回読んでみます。

その他、人類学の方は論文が多彩でございます。先ほど議論があったように、自らの仮説、論理、思考に基づくモデルを提供するタイプの、非常に抽象度の高い論文が幾つかありました。内堀先生の論文は、私は今朝まで全然分からなくて、今朝三回目に見てようやく理解した気になっている。ようやくこれは誰に聞かれても分かるという気がしまして、理解してみると何もコメントすることがなくなってしまって、全てのメモが無駄になりました。た

だ一点、これは民族論の時から思っているのですが、制度を定義するときに、「あるべき人間の共同性を表すイメージ、あるいはそうしたイメージを支え具現している社会的事象」という形で、イメージと社会的事象を一遍にどさっと持ってくるというのは、私は合わないなという気がいたしました。どうしても二つのレベルを分けたくなってしまうということがあります。

北村先生の論文は、制度を進化論的に考えてあるモデルを提示するものだけれども、これは非常に強い前提があって、一つ目の前提が、制度は人々が生き続けようとする上で放置できない問題に対処しようとして工夫される装置であると。要するに問題対処のための装置だということです。二つ目は、制度は個人のレベルでなされる問題解決に役立つようにと工夫されたものではなく、資源の共同利用や直面する課題への共同対処という、いわば集団的なものとして取り組むために、必要になるような装置だという前提です。私にはこの前提が本当に成り立っているのかどうか、全く自信がありません。この前提がないとすると、これは成り立っていれば成立するけれども、成り立っていなかったら全てが消えてしまう議論であるという気がします。

船曳論文は、私の指導教員だという理由もあって、実はこれは既に英語で出ている論文と内容が重複していて英語で読みましたので、私は理解したつもりになっています。ただ、これは非常にシンプルで形式化されたモデルなので、この本の中で論じられている、例えば人々が行為を繰り返していくですとか、あるいは情動の問題だとか、さまざまな問題がこのモデルとどういう関係にあるのかというのは、当然この論文では答えられていないし、序論を見ても結論を見ても書いていないので、それはこのモデルを真剣に考えるのだったら考えなければいけないことだと思います。

黒田論文については、ここであまり意味のあることを言えそうにありません。印象的だっ

たのは、ボノボもいるのだという話が最後に出てきまして、それが「私たちの進化が必ずしも暴力の血で染まった道でなかった可能性」を示唆している、というようなことをおっしゃって本稿を終えているのが、何か不思議な感じがしたと言えば不思議な感じがいたしました。

あと、足立さんに触れるのを忘れてしまいました。後でメモが見つかったらということで、すみません。

全体的にも何か言わなければいけないのかなと思うのですが、まず、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学という、個体とその集まりに対する比較的長期のフィールドワークという手法を恐らく共有している三つの学問の研究者、隣接する学問の研究者が人類社会の進化を論じる、というのはいいのですが、ただこの三つの分野の研究者だけが他の専門分野の研究者に対して圧倒的な優位性を持っているという感じはあまりしないのです。

早木さんや寺嶋さんが扱っている、例えば個体発生的なものから進化を見るという研究は、もちろん僕は完全に素人ですが、いっぱいあって、例えばトマセロの議論などはこの論集でもあちこちで引用されているので、その辺を入れるとどうなるのかなというのは個人的には気になりました。

それから、もう一つ、社会文化人類学から制度を進化史的に論じることが難しいのは、一つには、言語学であれば、例えばピジンの研究というのがあって、それによって随分言語学が変わったということがあったと思うのです。そういうことはなかなかごくたまにしか起こらないし、起こったとしても容易に研究しがたい。僕は床呂さんの論文できっとそういうのが出てくるのだろうと思ったのです。それに近いようなこと。ところが、出てこなかったので残念でした。河合さんのものも、レイディングではあるのだけれど、むしろ儀礼化されていると。あれがむき出しの暴力でがんがんやっているのだったら、それに近いのかもしれな

い。それがないのは、やはり人類学からのアプローチには厳しいなという気が個人的にはいたしました。

この論文集は、これだけばらばらだから最後に編者が結論を書いてくれた方がきっと読みやすかったような気もするのですが、ただ河合さんが既に言われていたことで、ここで言うことはなくなってしまいましたので、これは。

（河合） 以上ですか。

（名和） いや。もう少しやります。あと五〇〇字くらい。この論集は、多くの論考が慣習的行為とか行為の繰り返しみたいな、形式化してそれが人間の場合であれば意識から落ちていくというような方向性を非常に強調していて、それに儀礼化の議論が結び付いていて、もう一方で感情とか情動の問題というのが出てきていて、いろいろ共通点があるのだけれど、それをこちらで探さなければいけないというきついことがあります。

十分にまとめられていないのですが、あと二つのことを申し上げます。一つは、儀礼とか言語という言葉をこの手の研究会で使うことにどれだけ意義があるのかなということがあります。僕はむしろ儀礼という言葉は、とにかく異なるプロトタイプに基づいて異なる議論が山のように出ていて、田中先生もごく部分的なレビューですし、言語に関しても、例えば寺嶋先生が言語そのものはさまざまな集積であり、ある日突然現れたものはないはずだと言っていますし、黒田先生も、「完成された言語」をかぎかっこ付きで書いていますので、言語のあるなしみたいな話ではなくて、言語と言われているものを何か区分けして言語という言葉をなるべく使わないで論じてみる、あるいは儀礼とか儀礼化という言葉は分野ごとのコミュニケーションで何か誤解を招く可能性もありますし、何を言っているかよく分からないということもあるので、それを飛ばしてというか、それをより分かりやすい言葉で言い換えるようなことをやってみたらいいのではないかなと個人的には少し思うところがあります。

それから、人間社会の中の話だと、床呂さんが言われた制度Ⅰ、制度Ⅱのような話以前に、曽我さんが論じている極めて規模の小さい社会みたいなのがあって、それとより規模の大きい一五〇人以上の社会というので、本当に切れるのかどうか私には分かりませんが、例えばピエール・クラストルみたいな人がはるか昔にいて国家に抗する社会みたいな議論をしていて、むしろそこは、人数が問題なのか、農耕が問題なのか、定住が問題なのか、何が問題だか分からないのですが、人間社会の中に幾つかの段階があって、多分床呂さんが言っている制度Ⅰ、制度Ⅱみたいなこと以前のところに既に大きな区分けがあって、そこについては曽我さんがちょっと触れているぐらいで、他の方はあまり触れていない。大村さんは、いわば小さな社会のことをやっているはずなのだけれど、彼の議論はそこから小さな社会の話になるのではなくて、人類一般はこうであろうという話に飛んでしまっていますので、その前にやることがあるのではないかなという気がいたしました。

それから、もう一つだけ、他者についてなのですが、例えば曽我さんがブッシュマンとかピグミーの例を書くときに、彼らの社会というのは自分たちで完全に閉じていて、外部の社会から隔絶したものとして扱っている。しかし、必ずしもそうではなかったというような研究も出ているという話は私も聞いていて、それがどれぐらい正しいのか私には判断できませんが、そうすると、ダンバー数の中にその人たちが入るのか、あるいはたまに会う人だから入らないのかもしれませんが、問題は残るように思います。あるいは河合さんの議論だと、例えば民族を超えた他者との制度の共有みたいな話がされているのだけれど、その共有の在り方がある範囲で閉じているのか、曖昧にずるずると違うものになって広がっていくのかはよく分からないということがあります。

あとは、例えば足立さんの混群のような話で、他者の問題はどう現れるのか、黒田さんのチンパンジーの話では、交戦中の「我々でない者たち」が他者になるのか、等々、この論文

を読んでいると既に他者の話が出ていて、船曳さんの論文など、既に半分他者について語ってしまっているものまであります。ということで、次回の『他者』の論文集も楽しみにしております。これだけ言うと、きっと次は呼んでくれないのでは、とおそれていますが、次にマイクをお渡し致します。

（河合） どうもありがとうございました。非常にたくさんのことを細かく読みこんでいただいてありがとうございます。この後、どれだけ答えられるか分かりませんが、次のコメンテーターであります山極寿一さんの方に移ります。山極さんは、日本のゴリラ研究の第一人者で、長くマウンテンゴリラの研究に、最近ではニシゴリラの研究に携わっておいでです。それではどうぞよろしくお願いいたします。

2　山極　寿一（京都大学）

河合さんの出す本は本当に重たくて、持ち運びができない。この一〇月一日（京都大学の総長になって）からあちこち飛び回ってばかりで、何度かこの本を持ち歩いたのですが、なかなか開くチャンスがなくて、これは言い訳になりますが。

今日、求められているのは、恐らく霊長類学と生態人類学の辺りかなと思います。内堀さんの先ほどの自己反省にもあったように、これは「進化」と書いてあるのですが、進化の話はほとんど語られていない。実は、これは伊谷さん、黒田さんにつながる一つの伝統に端を発していると僕は思います。進化の話というのは、セレクション（淘汰）と環境抜きには語れないのです。淘汰という話は一つも出てこないし、環境という言葉を出したのは足立さんだけです。だから、まさに今、欧米で行われている進化論についての議論にはほとんど言及

しないという態度を貫いている。これも一つの見識かなと思うのですが、実は伊谷さんがそうだったのです。

伊谷純一郎の社会構造論、これを本当に簡単に言ってしまいますと、群れという可視的な部分を一つのユニットと呼んだのです。この進化のプロセスを通時的な側面、これをダイアクロニックといいます。それから共時的な側面、これをシンクロニックといいますが、から捉えようした。通時的な側面というのは、一つの群れにオスなり、メスなりが出たり入ったりしていくというプロセス。つまり、いろいろ変わりながらその構造が保たれていくという話。もちろん、生まれたり死んだりする個体も含めます。共時的というのは、その群れがそういった性・年齢構成とサイズで比較的安定した構造を保ちつつあること、一つのまとまりとして目に見える形で安定しているということです。

チンパンジーを論じる人も、それから黒田さんにしても、北村さんにしても、曽我さんにしても、安定ということを非常に重要視しています。つまり、この通時的な構造と共時的な構造が相織りなしながら、安定を保っていくというところが、種の特徴なのです。それを、今西錦司さんも伊谷純一郎さんも、「種特異的な社会」と呼んだわけです。実は、逆説的に言えば、その安定性が崩れるところに制度あるいは規則が立ち現われるのではないかというのが、皆さんの意見の裏に見えている話なのだと思います。アプリオリに、生物というのは、その安定性を常に求めているのだ。これが北村さんの意見に表れているのです。

本書では、足立さんの言っている「場」、それから「集まる」ということがキーワードになっています。『集団』という本が既に出ているので、実はこの『制度』を書かれた方々はこの『集団』という本の中で論じたことを前提として書いているから、この『集団』という本を知らない人にとっては、この集まるという点については分かりにくいのかもしれない。『集団』という本には、ある程度進化的な側面に従って「集まる」ということを論じています。

私もあまり真面目に読んでいるわけではないので、そこには深く踏み込めないのですが。

ここで重要なのは、「場」という問題です。これを先取りして言ってしまうと、足立さんが言っている場というのは、例えばこれを規則、すなわちニッチなのではないかということなのです。これは後で足立さんに聞いてみたいのですが、足立さんは、規則のことをニッチと言い表したかったのではないか。ニッチというのを二つのこれまでの仮説のうち、足立さんはエルトン流のニッチを採用した。例えば蜘蛛の巣のようなと言っているところでは、いろいろな種が張り巡らせているその種の動態の中でつくり上げた環境というものが現出するわけです。それは霊長類にとっても人間にとっても、規則と言い表してもいい。足立さんは生態学的なニッチという言葉を、社会学的な役割というふうに言い換えてもいいと言いましたが、まさにそのことを指しているのではないのかなと思います。

なぜ霊長類が生きる場所を持っていて、集まるのかと言えば、これは今西さんの言う生活場所なのだけれども、それは原因があるからです。さっき名和さんがちょっと批判していたけれども、その大前提を北村さんが立てた。これは、よく北村さんが立てたなと思います。北村さんはこういうことを前提にしない人だったから。対処すべき問題を適切に共同で取り組む、そういった相互システムの安定的な再生産が制度につながるというわけです。つまり、適切に共同で取り組まなくてはならないということが前提なのです。その適切なというのは、行為と対象に向けられている。それが制度を生み出す源泉である大前提だというわけです。でも、ここに、なぜそういうことが起こるのか、背景もその機序も語られていない。これが京大の人類学、霊長類学の考え方だと思うのです。

そこに普通、欧米の霊長類学者は食物と性を持ってくるわけです。それが個体の生命を維持する、あるいは、繁殖を通じて次世代へ向けての個体の時間的な連続性を維持する淘汰の対象になるからです。行為というのはどこに立ち現れるかと言ったら、食と性を巡る個体間

の葛藤の中で立ち現れるというのが欧米の言い方ですから、それを決して言わないというのが北村さんの見識なのでしょう。

私は、それに対してあまり賛成できませんが、でも、それを今回いろいろな形で、特にチンパンジーを対象として言おうとしたのは面白いと思っています。伊藤さんはチンパンジーの集まるという現象を「みんな」という言葉で言い換えた。「みんな」というのは少し突き放した言い方です。「みんな」から「われわれ」に至る。その次に論文を書いた花村さんは、「見えない仲間も含めたみんな」という意識があるまとまりというものを作り出していると言っています。これがいわゆる規則性とか制度につながるもう一つの前提です。これはいろいろな方々が言っていますが、しかし、それがどこかで「われわれ」という言い方になるのです。

この「みんな」から「われわれ」にどう飛べるのか、どういう変化を伴って「みんな」から「われわれ」に行けるのか。この「われわれ」という意識がなければ制度につながらない。この「われわれ」というところに、実はいろいろなことが条件として含まれています。例えば、ルールというのは、ある意味均質な他者というものを分類することによって成立するものです。類人猿と人間に共通な認知との方法として共感という能力が芽生えてくる。共感というものが模倣という行為を高めると言われています。これは、最終的には他者の中に自分を見るという形になっていきます。そこで、「われわれ」という意識が芽生える。あるいは、「みんな」という他者から自分を見て、自分の行為を評価するということが生まれる。そこで初めて「われわれ」という認識が生まれるのではないかと言っているような気がします。

最終的に、類人猿と人間とが違う点というのが集団へのアイデンティティだと思います。これは黒田さんが繰り返し言っていますが、例えば人間は自己を犠牲にしても集団のために尽くすということをやります。これは動物の中では決して見られない行為だと思います。つ

まり、自分の利益を上げるために集団の中にいるというのが原則ですから、もしそれがチンパンジーやゴリラの間に見られたとしたら、その集団というのを彼らはどう感じているのだろうか。ここに、実は共感という能力から、他者を労わる心、あるいはより大きなものの中に自分を定位する心、あるいは自分がその集団の中に取り込まれているというような思いが発達していくわけなのです。しかし、なぜそういう認識なり、能力なりが人類の進化の中で育っていったのか、そういう背景については皆さん語ろうとしない。

ただ、ヒントはあるのです。伊谷さんは環境決定論が大嫌いでしたから、この通時的、共時的な構造の織り成す場を進化をしていくプロセスとしてとらえ、その回転のシャフトとしてインセストタブーを位置づけたのです。インセストというのは、遺伝的劣勢を導き種を破滅の方向に向かわせる問題です。それを避けるために社会構造が一定の枠付けをしている。恐らくこれが伊谷さんが考えた規矩という概念です。黒田さん的な言い方をすれば、逸脱がどんどん見られるような状況というものが現出しなければ、その破綻を抑える規矩の進化も出てこないわけです。インセストはこれを破綻に導くものだからこそ、社会構造の枠付けという規矩が種の特性として必要になった。ではインセスト以外の破綻というのは何だろうかということなのです。それを考えてみなければ、多分進化という問題には迫れない。

そこで一つ出てくるのは、食物分配という現象です。食物分配をめぐっては、順位とか優劣とかいうような話が出てきます。私はニホンザルとゴリラの研究をしてきました。ここにいるチンパンジーの研究をされている方も、ほとんどニホンザルをやってチンパンジーを研究しています。ニホンザルでは食物をめぐる優劣順位というイメージが強くあるのです。直線的な優劣順位。つまり強い者が来ると、弱い者が食物から手を引く、優位な者がそれを独占する。そういう直線的な順位序列がある。

でも、チンパンジーにも優劣順位があるというわけだけれど、果たしてチンパンジーの順

位とニホンザルの順位は一緒だろうか。表現すれば一緒なのですが、どうも違うという直観があるのです。それはどこが違うのか。例えばチンパンジーを長年研究している西田さんは、それを仮の順位と呼んだ。一時的な順位という言い方をした人もいます。なぜそんな呼び方をしなければならないか。例えばこれは曽我さんもちょっと言っていますが、これは、一対一だけでは収束しない順位である。仲間が来ると、その順位が逆転する可能性も出てくる。だから、常に緊張をはらんだものになるということです。でも、それだけでどうも言い尽くせない何ものかがそこに含まれています。

私は、ゴリラを見てやっとそれが分かった。それは何かというと、諦めないという現象です。つまり、その場の、あるいはさっきルールというのは外にあるという言い方をされた方がいらっしゃいましたが、あらかじめ取り決められた行動の振る舞い、行動の規則性というものに納得しないというのが類人猿の在り方なのです。これは、食物分配に実は現れているのです。黒田さんも、食物分配をたくさん観察された方はみんな言っていますが、まず食物を所有する。これはサルにも類人猿にも共通です。基本的には、所有した食物に対して、「ちょうだい」とはサルは言いません。取ってしまったものは自己の所有物ですから、それをわざわざねだろうとはしない。だけど、チンパンジーやボノボは食物を手を差し出してねだり、その食物を持っている者がそれを出すというのが、あたかもルールのようになっているように見える。

実は、最近ゴリラも食物分配することを私たちは観察しました。この食物分配というのは、やはり執拗に食物を持っていない者が持っている者を追い掛けていって近くにずっといて覗き込む。そうすると、チンパンジーのように食物を手渡ししたり、あるいは食物を持っていない者が手を伸ばして相手の口から食物を取っていったりということはないのですが、食べかけの食物を地面に置くのです。それを取らせる。食物を置く、しかも食べかけのものを置

くということは相手に譲る行為です。だから、ゴリラとチンパンジーで、その行為の発現の仕方は違っているのですが、そこに流れている「諦めない」という執念深さは一緒なのです。つまり、そこに規則というものが現れる価値が出てくるのです。本音はこうなのだけれど、だけど、それを一時的に回避する手段として規則があり、そこに制度につながる規則というのが出てくるような気がするのです。つまり、建前なのです。本音と建前というのが遊離して、その場を繕う話として一時的に表れるのが制度というふうに考えた方がいいのではないかと思うのです。

もう一つ、これは北村論文にありましたが、食物分配というのはいろいろな動物に、親から子へという形で見られる。ただし、大人同士の分配というのはそれとははっきり異なるものとして定義されなければならない。そして、そこから贈与に飛ぶわけです。それは、先ほどのお話にもありましたように、何人かが贈与という言葉を書いています。でも、果たしてそうだろうか。

最近ジェギーという霊長類学者が食物分配の有無を霊長類の系統樹に乗せて比較しました。霊長類は、今、三〇〇種類ぐらいが世界で認定されていますが、霊長類全体でみると、親から子へも食物を分配しない種が多いです。分配なしです。そこに、親から子に分配する種が出てくる。そして、親から子に分配する種にのみ、大人同士で分配する種が出てくる。同性間、異性間で意味が違ってくる。ただし、この大人同士でも食物を分配する行為はほとんどが血縁の近い仲間同士なのです。血縁を通じた仲間の間にのみ見られたり、あるいは、交尾をする間柄に見られたりする。その中に一種類だけ他者に分配するものが出てくる。これが人間だということです。この他者に分配するという行為は、非常に危険なニッチに進出しなければ出てこなかったのではないかと推測されている。恐らくそれまで霊長類が経験していないような危険なニッチに人類が進出し、他者との間で頻繁に何らかのやりとりをしな

くてはならなくなって、そこで形式的な規則なり、制度なりというものを作らざるを得なかったことを反映している可能性があります。

もう一つここで言っていることは、親子で行われていた分配行動が大人の間に普及して、それがルールになるというプロセスが考えられるのではないかということです。実際ゴリラでも、私たちが報告するまで、大人同士の分配が確認されていませんでした。ところが、親から子どもへ、あるいは、ゴリラというのはアロマザリングと言って、他のメスなり、他のオスなりが子どもを養育することがあるわけですが、そういう間柄にはよく知られていたわけです。だから、ゴリラはなぜか大人同士の方に食物分配が普及しなかったというふうに考えられていたわけですが、それは、これまで研究されていたのはマウンテンゴリラといって、ほとんどフルーツという価値の高い食物が得られない山地林に生息する種だったからです。低地で私たちが観察すると、フットボール大のすごく大きなフルーツを食べる。それは、低地にしかないし、一人で食べきれないのです。それをみんなで食べるということが観察されたわけです。

だから、そういう条件が与えられれば、ゴリラはきちんと食物を分配する。ただし、チンパンジーとは違うやり方です。ここで面白いのは、そういった現象がまだありはしないかということなのです。つまり、親子で行われていたものが、大人同士に普及する行為というのが他にも見られないだろうか。結構見られるのですが、それをいちいち挙げていくと切りがなくなるので、一ついい例を紹介します。つまり、なぜそういう親子の間に見られた行為が大人の間に普及したのかという原因論です。これは高い認知が必要なく、実はアロマザリングをする、あるいは肩代わりケアをする、つまり母親以外の個体が子どもをケアする行為が日常的な種で食物の分配が多く見られているのです。南米に住んでいるタマリンやマーモセットという小型のサルです。一度に二頭、三頭の双子、三つ子を生むということが知られ

ていて、しかも体重の重い子どもですから、お母さんが一人で育てられない。そうすると、周りの年上の子どもや、あるいはオスがその子どもを抱いて、丹念にケアをします。こういう養育者と子どもの間に分配が見られる。そして実は面白いことに、養育者同士の間で食物分配が頻繁に起こるのです。

このことに注目して、分配が親子でも、あるいは大人同士にも絶対に起こらないニホンザルのような種と、このマーモセットたちの他者に対する行為を比較した研究があります。他者を思いやる行為、これをアザー・リガーデング・ビヘイビアというのですが、こういう行為がマーモセットたちにたくさん見られるということがわかりました。だから、類人猿のような認知の高度化がこの分配行動を生んだという経路だけではなくて、アロマザリング、つまり多産に伴う共同保育というルートを通じて、大人同士の間に他者を気づかうような能力が高まったという進化の経路が考えられるということなのです。

人間は、恐らく祖先の時代にこの両方を経路にして共感や同情の能力を高めたというのが私の仮説です。今の人間と類人猿を比べてみると、人間はすごく多産です。その多産性というのは、類人猿がずっと暮らし続けてきていた熱帯雨林から出ることによって生まれた人間の能力です。そのことを通じて、親子の間に行われていたものが大人の間に普及し、そして危険なニッチに足を踏み入れるに従って、段々とそれが制度として成立していった過程があるのではないかと思います。

今回の本は、そういった背景については何も分析していません。ただし、集まるという形を通して興味深いことをいろいろ論じています。例えば花村さんのプロセス思考的なものが目的思考的なものとははっきり分けられていて、相互作用を連続することによって、これは足立さんの言い方だけれども、規則というものにつながっていくという形、それがまさに集団のアイデンティティを生み出すようなものにつながっていったのではないかと思います。

恐らく、このニホンザルではルールだった、つまり他者を均質化することによって安定性をもたらすような仕組みが、相手によって自分の行為が変わり、しかも、自分と相手の関係性というものを諦めないということが生まれてきて、建前としての規則が必要になってくる。それは、どのプロセスで生まれたのかというと、これはゴリラを見ると分かるのですが、彼らは二者関係というのが二者だけでは完結しません。必ず第三者が入ってくる。そこで、彼らは一時的な収め方をする第三者がいることによってトラブルを抑えようとする。それは、対等性、一時的な平等性を担保する仕組みです。優劣順位を具現化しないでトラブルを収めようとするやり方、こういう方法が一方である。チンパンジーも、実は優劣順位をあからさまにしつつも、本音を諦めないで別の形（たとえば対角グルーミングなどの対等な姿勢）でその場を収束させようとするのです。そういう類人猿に共通な関係の作り方が、サルのかなり安定的なルールから逸脱して、規則を作ろうという方向に向かった可能性があるのではないかと思います。

それまでの霊長類社会では、他の動物と同じように、食べ物は常に場所に結び付いているものでした。あるいは、性というものも個体に結び付いているものでした。それを、実は場所から引き離し、あるいは、均質な人から引き離して、食も性も操作可能にしたというのが、人間の制度へつながる大きな特性ではないかと私は思っています。つまり、操作可能な資源というものを共同で管理しなければならなくなった。あるとき人間は、食物をそれが生えている場所から取り去って、新たに再分配し始めたわけです。つまり自然のままの密度や量ではなくて、人が操作できるものとして食物というものが再定義される。そのために、新たに規則が必要だったわけです。しかも、食物は人に付くから、所有ということが問題になってくる。実は性もそうなのです。ゴリラにしてもチンパンジーにしても、ある性を表現する、あるいは発現する時期は決まっていた。人間は、それを不定期にしたのです。だから、性は

個人の意思によって引き出すことができるようになったわけです。そのことによって、人間はそれを発現することを集団で管理しようとし始めた。それが制度の必要性を高めたのではないかというふうに思います。

この本の中でふつふつと沸きたってくるのは、人間の制度以前の出来事です。そのいわゆるモチベーション的なところはよく分かりました。だけど、そのプロセスをどういうふうに設定したらいいのか、まだ議論の余地があると思います。

制度というのは、本音と建前みたいなもので、その本音という部分をきちんとわれわれが理解しないといけないのではないか。例えば共感能力を高めたことによって、類人猿と人間に共通な非常にしつこい、諦めない性根というものが生まれる。それを、形として制御するために制度という抑制のルールを生み出す必要があったというようなことを考えた方がいいのではないか。つまり、本音と建て前、制度は建て前です。よくゼロタイプの制度という形でインセストタブーが語られますが、これは別に破っても生物学的には大きな支障はないわけです。でも、破ってしまうと社会的に何かおかしなことが起こる。原初的な制度とはまさに服を着ているようなものです。裸になっても別に病気になることはないけれども、服を着ていないと人前では何かおかしな感じがする。そういった社会的な合意に至る過程というのをもう一歩進んで考えないといけないのではないのかなという気がしました。全然個々の論文の批評にもなっていないのですが、私なりにこの本の解釈の仕方を皆さんに提示させていただきました。

(河合) どうもありがとうございました。時間がどんどんなくなっていきますが、それでは、最後のコメンテーターとなりますが、国立民族学博物館名誉教授でいらっしゃいます野村雅一さんの方から、野村さんがインタラクションですとかコミュニケーション論などの先駆的なご研究者であることは皆さまもよくご存じだと思いますが、では、よろしくお願いいたします。

3　野村　雅一（国立民族学博物館名誉教授）

今日ここにお呼びいただいたのはこの論文集のなかに霊長類と人間を通じていわゆる相互行為についてのミクロな研究がいくつもふくまれていて、はじめに黒田さんの解説にありましたように、問題設定の重要な位置をしめているからだろうとおもいますが、個々の論文につきましては今日もその読み方や「人類社会の進化」における「制度」という点からの位置づけなどについて、すでにずいぶんつっこんだコメントがありましたので、いまさら意見をのべるのは差し控えさせていただきます。かわりにというと変ですが、河合さんがご説明されましたような「人類社会の進化」という壮大な企図をもったこの共同研究を日本の戦後史のなかで考えてみたいとおもいます。そのあとで、言語と制度の関係、いやむしろあまり関係がないのではないかということについてふれておきます。

戦後七〇年になろうとするわけですが、近年戦後の日本社会を否定するような声が高まっています。外からあたえられた憲法の改正を急ごうとするとか。たしかに外からあたえられたにしても、憲法は理念であって、それを実質化しようとしてきたのが戦後という時代の日本人の営為だったとおもうのです。たとえば、いま男女平等、同権というといつの話しかといわれそうで、いかにも古くさくおもわれるのは、日本人がそうなるように努力してきたからだとおもうのです。学術もそこで重要な役割をはたしてきました。というか、文学などと同様に、言論統制がとけて学術は戦後すぐに沸騰しました。マルクス主義が前面によみがえっただけではありません。人間性の根本にかかわるようなさまざまな問いかけがおこなわれ、研究構想が立てられました。『集団』についで『制度』という二巻の成果をまとめられた「人類社会の進化」というこの共同研究は、そんな日本の戦後の研究を受け継いで展開し

ているようにおもうのです。人類学に限らず、いまごろこのような大テーマに正面から取り組む研究者はまずいません。ただ、戦後一時期には世界史的、あるいは人類史的な学術研究があったのです。もちろん戦前からの延長という面もあったにしても、戦争とのかかわりをとかれて、まったく自由な学問として提唱された。今回の『制度』を読ませていただいて、わたしは戦後のそういう学統をおもわざるをえませんでした。

そのひとつの例なのですが、ここに『思想の科学事典』（久野収・鶴見俊輔編、勁草書房、一九六九）という事典をもってきました。これはもとは『人間の科学事典』（思想の科学研究会編）として一九五一年に出された事典の改訂版なのですが、膨大なものです。社会、政治、経済から性、コミュニケーション、論理、科学、遊び、教育など、およそ人間にかかわりそうなすべてを一巻におさめています。戦後まもなく企画されたのでしょうが、巻頭には「人類の将来」という項目もあります。それを当時二〇代だったはずの社会学者の加藤秀俊さんが書いておられる。人類は、はたして人類という意識をもつ以前に死滅するのだろうか、とか。続いて「環境」という章があって、その「序説」は「人間とはどういうものか？」と書きだされます。「人間を理解するのに、人間と自然とを対比してとりあつかうのも一つの方法であり、また、人間を自然の一部としてとりあつかうのも一つの行き方である。後の行き方をとるとするならば、自然というのは世界と同義であり、その場合、問題は、この世界において、人間はどのような位置を占めるか、ということになる……。問題に接近する道に、二つの型がある。一つは発生論的位置づけであり、一つは機能論的位置づけである。……」いずれにしても進化という考え方がここで出てくるのです。執筆は梅棹忠夫・川村俊蔵の連名になっていますが、後者の立場をとるようです。「進化とは、世界の機能的連関の発展であり」云々、と書かれています。ダーウィニズムがまだ今日のように自明視されていなくて、この進化との関係から先ほど曽我さんが紹介された生態人類学のようなものが「人

類生態学」という項で構想されています。この本の霊長類に関する論文も広い意味では「機能的連関の発展」の研究といえるのではないでしょうか。ともかく、人間科学でこのような大上段にふりかぶった学問は途絶えたばかりにおもっていたのですが、どっこい、いまもここで「人類社会の進化」の研究として営々と続けられている……、というのはわたしの理解ですが。

戦後の日本でおこった学問の一つはまちがいなく霊長類研究でしょう。この事典にはその霊長類研究のそれまでの達成が紹介されていますが、河合雅雄さんがどこかで書いておられたように、出発時点からサルのカルチャー（「類カルチャー」）とかパーソナリティだとかが語られたというのも日本の霊長類研究の独自性ではないでしょうか。事典には「今西錦司」、「すみわけ」などの項もたてられています。じつはＡＡ研での研究会ということで、お亡くなりになった山口昌男さんのことをおもいだしていました。大塚時代にわたしもお世話になりました。その山口さんに『未開と文明』（平凡社、一九六九）という本があります。おそらく最初にだされた本で、「編集・解説　山口昌男」と記されているように、巻頭に山口さんの非常に熱気のこもった解説がおかれた人類学にかかわるアンソロジーで、大きな影響があったとおもいます。レヴィ＝ストロースの「人類学の創始者ルソー」からはじまりますが、その次に今西錦司の「遊牧論」が載せられているのには、いまみてもおどろかされます。各論文に山口さんの解題がつけられています。今西論文については、これによって「今西錦司氏の徹底してゲシュタルテイックな『遊牧空間』論の中に入っていくことになる。……そこで起こることは、この『空間』の中では意識が人間を考える規定的要素ではないということである。すなわち、『遊牧空間』の中では人間は、人間以前の存在様式から受け継いできた、存在するための『かたち』として、動物と共生するのである」といって、氏の「すみわけ」理論はゲシュタルト理論の人類学におけるもっとも成功した展開の例と理解していると

書いておられます。じつに的確で見事な紹介ではないでしょうか。ここにも現在の「人類社会の進化」の研究、そしてこの『制度』という本につながる一本の線がみえてきます。この論文の終わりには一九四五年一月五日、西スエトにて、と脱稿の日づけが記されていますから、戦争中に蒙古で考えられたものでしょうが、それが『遊牧論その他』（秋田屋書店、一九四八）に収録されて公刊されるのは戦後の百家争鳴のなかです。敗戦で国土が焼ケ野原になって、大都会も一望できるどころか、隣の町まで見渡せるようなかで、一種の災害ユートピアが出現したとき、世界や歴史を全体として明晰に説明する理論は受け入れられやすかったとおもいます。ところが、冷戦から高度成長を経て秩序が復活すると、見通しが悪くなって、全体はみえなくなり、大きな理論にはリアリティが感じられなくなる。現代の学術の細分化にはそんな背景もあるとおもうのですが、だからといってかつての研究を「戦後」は終わったといって一括処分することはできないとおもうのです。代わりのものもできていないのですから。

河合さんたちのこの共同研究は日本の戦後をになった先輩たちの少なくともひとつの水脈をくもうとする貴重な研究だとおもいます。ただ、ちょっとわからないことがあります。「人類社会の進化」ということですが、河合さんが序章でのべておられるように、人類を同じ霊長類の一員として、人類社会を霊長類のそれと同じ地平においてみたとき、まず群れが目について「集団」として研究したというのはよくわかります。けれど、集団をたばね、支えるものはなにかと問うて、次に「制度」をとりあげるのはちょっと飛躍があるようにおもうのです。制度ときいてなんだか違和感をおぼえるのは、ことばの問題かもしれませんが、制度や規則のない秩序、暗黙のオーダーがあるとおもうからです。言語がないと制度がないという人がいるそうですが、言語はなくてもなんらかの社会秩序はあるはずです。河合さんが原（プロト）制度とよばれるもの、あるいは黒田さんがソーシャリティ、「自然制度」といわれ

たものがそれかもしれませんが、わたしもかかわった相互行為　interaction　の研究というのは、人が集まるところにはオーダーがあって、それは言語や文化をこえたものかもしれないという想定でおこなわれてきたものです。そこはルソーのいうピティエ、同胞への愛が関係しているのかもしれない。ルソーを引きあいにだすと、人間の自然状態、本性がそこにあるということになります。しかしルソーもそれだけで社会が成り立っているとは考えていないわけで、法とか国家とかが必要になると「一般意思」という難解で、なんだか強権的にも読める概念をもちだしてくる。著作でいうと、『人間不平等起源論』と『社会契約論』のあいだには大きな跳躍があります。今日の意味での制度　institution　ということばはラテン語からつくられた西洋近代語のようですから、あきらかに前者はふくんでいません。キリスト教で institution というと教会（神のめす集会）のことだそうですが、ふつうなんらかの権威が後ろにある。こちらは社会秩序といっても自然に生じるものではなくて、手続きはさまざまであるにしても人びとがつくるもので、ある程度は言語が関係します。ある程度というのは、規則や制度がすべて言語で定められるわけがないからです。交通ルールがそうでしょう。自動車の運転には道路交通法や条例による定めがあって、それがわかっているかどうか試験をおこなったうえで免許を交付する「制度」があります。事故がおきないよう安全にということなのでしょうが、刻々とかわる個別のシチュエーションが明文化されているわけではありません。歩行については免許もありませんから、マナーによって安全を確保するほかありません。マナーというのは、霊長類についての黒田さんのニュアンスのある言い方を借りると、「相互の期待」です。人間でいうと、その場の関係者間の期待ですが、それにそむいても警察とか第三者がでてくることはない。わたしも道を歩いていてふと立ち止まって、後ろからくる人に怒られることがよくあるのですが、たいていにらまれるだけでことばで抗議されることはありません。しかし、最近の歩きスマホ（スマホ歩き）のようになると駅や警察

の「指導」が入ります。さらに危険になると、公道は歩いて前に進むという道路交通法などがもちだされますが、それはその場の当事者ではなくて第三者の判断によります。

霊長類には交通問題はないでしょうから例は適切ではないかもしれませんが、人間の交通ルールひとつをとってみても、暗黙でほとんど意識もされない「期待」からあきらかに「制度」とよべるものまで社会秩序を支えるものには段階があるようにおもうのです。たしかに言語が介在するかどうかで大きな違いがあるようにもおもえます。しかし実際はそれらは連続的で一体のものではないでしょうか。制度といわれるものの多くはすでにおこなわれていることをより確かなものにするという面が大きいのではないか。たとえば問題になっている言語ですが、言語が制度であるとしても、それは過去の発話の総和のうえにつくられたもので、今風にいえば、これからの発話によってたえず上書きされるわけです。語源などというものがあやふやなのも当然です。

人間の集団は千差万別です。規模からしてじつにさまざまで、曽我さんが巻頭の論文で見通しをたてておられるように、ある一定規模を越えると制度が必要になることもあるくらいに考えられないでしょうか。現代日本の同居家族のような最小規模の集団でも、複数の人間がいっしょに暮らしていると習慣とかしきたりというものができてきます。ホテルと違うところですが、その認識は各人かなりまちまちで、「足音をたてるな」とか「今日の味噌汁は……」とか、いわゆる箸の上げ下ろしをとやかく口にだしていうことは、相手がおさない子どもでないかぎりできません。共同生活が成り立たなくなる。隣近所になると殺人事件がおこったりする。門限とか一部に指示できる約束事はあっても、とても制度とはよべないような、ことばで注意することができないことが非常に多いとおもうのです。まさに相互期待で、黙っているほかありません。この「制度」研究の出発点には人間の社会集団を長期間、安定的に持続させるものはなにかという問いがあるようですが、家族とか近隣社会とかの場合の

ようにはじめから「こうすべき」、「ねばならない」では成立しないし、すぐに分解してしまう集団もあるのではないでしょうか。本書の論文の多くからデュルケム学派風の印象をうけるのですが、人間の集団はたとえ制度的なものによってまもられていても、そこには本人の意志とは関係なくそれを分化させる個人という契機がひそんでいます。日本語に「兄弟は他人のはじまり」という言い方がありますが、集団と個人はあやうい緊張関係にあります。

集団へのアイデンティティも制度によってつくられる人間的なものだといわれます。これは伊谷純一郎先生のお考えのようですが、「帰属意識」と訳されるものでしょうか。アイデンティティにはしかし、「拠り所」と訳されるものもふくまれています。人間の社会集団には住む土地があり、そこには景色、匂い、音、ことばの訛りなどがあります。離れていると「なつかしい」、「帰りたい」というノスタルジーをかきたてたりするものですが、逆にそこにとどまっていると反発心をおこさせ、人をメランコリーにもするものでもあります。このＡＡ研におられた川田順造さんが『母の声、川の匂い』（筑摩書房）という少年期まですごした東京・深川について読み終えるのがおしいような本を書いておられますが、「自分を生んだ地域のアイデンティティと、改めて向かい合ってみたくなった」ときにたちあがってきたというのがタイトルにあるようなことどもです。これは集団のメンバーシップの問題だけではありません。もっとも、ものは考え方次第で、明示化されることだけでなく暗黙のならわし、慣習、河合さんが最初に説明された custom や convention などもふくめて制度といえないことはありません。

それから、制度的なもので本書ではほとんど扱われていないものに、作法とか、エチケット、先にもあげたマナーといわれる行動領域があります。というと自明なことのようにおもわれるかもしれませんが、あんがいそうでないのです。作法は日本語ですが、世界のどこにでも作法に相当するものがあるわけではありません。たとえば中国では「礼」の体系の一部

ですし、イスラム社会ではまた別です。しかしいまここでは、そういうものがある場合について考えてみることにします。ヨーロッパではテーブルマナーをはじめ日常の立居振舞いを教える小冊子が一三世紀頃からたくさん刊行されます。むかしそれらをまとめて勉強したことがあって、平凡社の大百科の「作法」の項はわたしが総説を書いていますが、難渋しました。作法もマナーもたんなる習慣ではありません。たくさん本が書かれているように、言語化され、意識度は高いけれど、強制力はありません。人の不作法をとがめるのはもっと不作法だと西洋の作法書にはっきりと書かれています。それでも交際の仲間はずれにされますので拘束力はつよいといってよいでしょう。フランス語で社交の作法のことをいみじくもsavoir-vivre（how to live）といいますが、作法は複数の人間がいるところの生活をすみずみまで拘束します。本書の杉山論文は「感情の制度化」という興味深い論点を提示していますが、感情も作法の領分です。杉山論文のテーマはアフリカの農耕民のあいだでの「妬み」という本来、社会的な感情が外化されモノのように扱われて制御される過程ですが、一般に人の感情を拘束するのはむずかしい。不可能かもしれません。しかしそれをあらわす表情はきびしく拘束されます。マルセル・モースが「感情の義務的表現」について書いていますが、社会的場では場面ごとに場面感情があり、悲しい場面でうれしそうな顔をするといったまちがいはゆるされないように。ともかく、これも制度と考えていいのかもしれませんが、人間の社会にはこのような作法とかマナーとかいわれるかなり大きな領分が設けられている場合があるといっておきましょう。その上に法令があるわけです。そして、さらにいえばモーセの十戒のように宗教的戒律があたえられていることもあります。「してはならぬ」という掟がならぶこれこそは言語がなければ成り立たない究極の制度かもしれませんが、制度はつくられるもの、人間がいつかつくったものであるのに、戒律は神から示された啓示で、人がつくったものとは考えられていません。

Ⅳ　コメント

言語がないと制度はないだろうと人文系の人がすぐにいうと黒田さんがおっしゃいましたが、わたし自身まったくの文系人間としてひらきなおっても、そうはおもえません。もちろんなにが制度かという問題はありますが、長々とお話ししましたように、社会における意味や価値の多くは言語を介さず伝えられていると考えています。いまいった絶対的、超越的なものでさえも、お叱りを覚悟で申しますと、必ずしもヨハネ福音書がいうように「始めに言葉（ロゴス）はおられた。ロゴスは神とともにおられた。ロゴスは神であった……一切のものはこの方によってできた」というように考えなくても受けとめることはできるはずです。いったい言語とはなんなのでしょうか。それは人間としてのわれわれのほかの霊長類からの距離をはかろうとするとき、いかなる「ものさし」になるのか。言語がどうして生まれたかについては、どんなとっぴな説も無下にしりぞけられないほど諸説あります。言語の機能もさまざまで、シンボル操作（象徴形式）というのはそのひとつにすぎません。霊長類の言語能力の研究もほとんどがシンボル操作能力の可能性の研究になっているのにはかねて疑問におもっています。言語をロゴス、西洋流の文法的理性と同一視するような考え方はおかしいとおもうのです。あたりまえですが言語はじつにいろいろです。じつは、わたしは小学一年生の国語教科書を少し書いているのですが、今度その改訂の依頼があって、われわれが話し書いている日本語、あるいは国語というものはなんだろうと、いまごろになって昔の教科書にあたりながら勉強しました。

ご存知かもしれませんが、大正期からつかわれた戦前の一年生用の代表的教科書は、最初に片仮名でいきなり「ハナ　ハト　マメ　マス」とでてきます。なにか韻文的なのです。音に韻律があります。「ハナ　ハト」は「ハ・ハ」という頭韻。ハトのあとはマメだから意味も関係ないことはない。マメときたら、マメはマスではかるからつながるけれど、どちらかというとこれは音であつめてつなげているようにおもうのです。もう少し後になると、昭和

八年からですか、「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」になります。これはすべて「サ」です。とにかく音なのです。ことばはリズムやハーモニーが大事ということなのでしょう。明治にさかのぼると、「ハタ　タコ　コマ」という素朴な尻取りみたいなのもあります。戦時体制になると、「アカイ　アカイ　アサヒ　アサヒ」とか「ヘイタイサン　ススメ　ススメ」とか、後のほうは文になっていますが、韻律重視はかわりません。日本では子どもに最初に教える言語は意味を伝えるものより音の響きを耳に慣れさせるものであるべきだという考えがあったのでしょう。小学校の国語教科書で戦後のいちばん大きな変化は、平仮名が採用されて、やや説明的になったことでしょう。昭和二一年は紙がなかったこともあってか、昭和二二年が最初なのですが、そこに「みんな　いいこ」とでてきます。片仮名を平仮名にかえたというのも大きな変化ですが、このことばは相当考えられているとおもいます。今日はじめに戦後的なものが消されていくといいましたが、これはいまの教科書に「みんな　なかよし」と、ほとんどおなじような形で残っています（教育出版　しょうがくこくご　一上）。昔は「おはなを　かざる／みんな　いい　こ」だったのが、いまのは「なかよし」という最初の単元で、海岸で熊や猿たちがボール遊びをしているのをむこうの海からイルカたちがみつめ、空からはカモメがながめるといった絵が見開きで描かれています。そこにとつぜん虹がかかって、むこうからクジラがあらわれ、動物たちは飛び上がってよろこぶ……そして、「みんな　なかよし」です。メッセージ性が高くて、かなり説明的になっています。「みんな　いいこ」のことば、思想が、「みんな　なかよし」と多少かわっても残されているというのは、この思想の実質化はいまだに課題だということなのではないでしょうか。

最後になりましたが、本書を読みながら進化という問題を考えるめったにない機会をあたえていただいたことを感謝します。人間から霊長類をみるときと、霊長類から人間をみるときとではみえ方がちがうようにおもいました。もう少し考えてみるつもりです。

V　討論

（河合）　どうもありがとうございました。

どうしましょうか。まず、一人一人順番にというような時間的な余裕が全然ないので。あと一五分ぐらいで会場を出なければならないと思うのですが。ですから、ここで手を挙げて何かおっしゃりたいこと、ここでは答えておきたいことというようなものを挙手でお願いしたいと思います。それから、フロアの皆さんの方からあれば、コメントを頂けますか。

（内堀）　では、野村さんに。「ハナ　ハト」というのは、「マメ　マス」というのは、ハの字を使ってハナにもなるしハトにもなるということを恐らく伝えたいのであって。だから、音というよりも、むしろ近代言語学的な発想で、それを小学校一年生に当てはめようとしたのではないですか。

（野村）　どうしてハなのかということ。ハが、何か入学時の桜とかとかかわりがあるのかどうか。

（内堀）　それは、イメージとしてはなぜかというのは分かるけれども、教科書執筆者の意図というか、あるいは戦前の文部省の国語科の意図としては、音というよりも、音と字の関連性のこと。それが、字は少なくとも片仮名というか、象形文字は恣意的なものなのだということを伝えようとさせようとしたのではないですかという。

（野村）　しかし、片仮名はやはり音を表す。

（内堀）　いやいや。もちろんそうなのだけれども、それは、ハナのハでもあり、ハトのハでもあるのだということを、小さい生徒に言わせるのが主目的なのではないかなと思うのですが、どうなのですか。

（野村）　それはちょっと分からないです。なぜハなのかというのが。一字だけのもあるのですよ。明治の初めにはただハというのが。それで横に絵が描いてあって、木の葉、葉っぱと入れ歯がある。これはどうなのか。

（内堀）　書きやすいからです。とにかく字というものの性質。

（山極）　でも、ノというのが一番書きやすい。

（野村）　読み書きが日本では中心なのでやはり字を教えるということはもちろんあるだろうとは思うのですが、しかし意味より音が重視されているのだなと思える。「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」というのは最初の文なのですよ。文になっている。

（内堀）　声に出しやすいというものを使ったことは確かですけれどね。だから、意図とは別だというか、別にあるようだ。

（山極）　何か、あかさたなという母音のAが入るような発音というのが一番出しやすい音声と聞いていますけれど。

（河合）　人間が発声しやすい言葉から入っているのかなという感じなのですが。

（内堀）　それから全然関係ない話だけれど、山口昌男さんが編集した本ですが、当時、山口さんは思想の科学に確か関係しているのですよね。

（野村）　そうですか。

（内堀）　ええ。思想の科学に執筆していることは確かです（思いちがいかもしれない）。ですから、ひょっとするとこういうのを知っていたのかもしれない。梅棹さんなんかの続きで今西さん。知っていたからもちろん書いていたのだけれども、チャンネルがそこにあった可能性はあります。

（黒田）　では、もうほとんど先生方にしゃべってもらって申し訳ない。三人のコメンテーターの方からいろいろ冷や汗をかくようなご発言がありました。もう時間もないので一点だ

け申しますと、山極さんが話されたことに関係するのですが。それと花村（俊吉）さんにも関係するのかな。日本の霊長類学者は、先に集団を考えていました。要するに、個と個の交渉以上のものが社会にある、それが出発点です。

伊谷さんは、それ以上のものというのは何かということで、共存の在り方、共存のルール。それには二つの共存のやり方があって、優劣を特定して、不平等で生きていく。それから、対等でその場その場で関係を調整しながらいく、そういう二つがある。

平等原則の社会というのは、主にチンパンジーとボノボと。私はゴリラも平等原則だと主張しているのですが、そういうところでは、新たな、要するに、生き方の原則を打ち立てないと安定しないということになるので。それが、山極さんの言っていた、内部化の厳しい条件が出てくるもとで、そこで制度みたいな、コンベンションを固定するというふうになるだろうということは一応は考えています。ただ、そういうことをお話ししても、単に物語にしか過ぎないと取られる可能性もあるので今回は書かなかったのですが。

それと、やはり集団性だとか、アイデンティティということを考えておかないと、山極さんが昔から言っていますが、父というアナロジーです。集団を統一する際のシンボリックな存在、それは父であろうが、制度であろうが逆に構わないのですが、より具体的なイメージとしてある、父とか、そういうものも、やはり制度の発生ということになる。ただ、それは人類の進化の過程で、幼少期が、幼年期がすごく延長されている。幼年期の成長が抑制されて、あるときから急に大きくなって大人になっていって、そういうような成長パターンが出てくる。それは、旧人ぐらいからぼちぼち出てきた。新人類で固定していく。そういうようなことだと思いますので、そのあたりの問題を制度論の方に取り入れていくことがこれから必要かなとは考えています。

山極さんが言われたように、われわれは進化のメカニズムを言っても嘘っぽい。進化のメ

カニズムというと、どうしてもダーウィニズムにすり寄ることになるので。そういうことが実はあるのですが、あまりそういうことを今さら言っていてもアナクロにしかならないかなという反省はしています。

（曽我）　それで言うと、今日の三人のコメンテーターの方々がおっしゃったことというのは、ここに集まっている人がそれぞれ文化人類、霊長類、生態人類という三つの一応異質なものが集まっているわけだけれども、ちょっと同質的過ぎやしないかという指摘にも聞こえて。名和さんも、最初の方で発達心理学とか、他のジャンルでもこういうことをやっているよという話でもあったし、山極さんの方からは進化の枠組みから言ったら全然違う潮流があるのはご存じですよね、と。

前に「集団」について考えたときは中川（尚史）さんにも入っていただいて、あのときには霊長類の系統樹的な慣性みたいなものを一応僕らは頭の片隅に置きながら話はしたわけですけれども。少し均質な中で考えてしまったかなというのが、この『制度』本については思っています。今、これから書くであろう「他者」についても、水谷さんの「遊び」の話とか、あと、馬場（悠男）さんのような、人類学の中でも形質を扱っておられる方などゲストスピーカーに入っていただいて、一つのテーマの広がりみたいなものをもう少し見ておかないと、自分たちを位置付けるのが難しくなってきているのかなという感じは持ちました。

（内堀）　では、最後に一言だけ。本自体について。ちょうど京大出版の方がいらっしゃるから面白いと思うのですが、やはり人類学、広い意味での社会も生態も霊長類も入れて、出身党派性というのはなかなか逃れられないのです。それで、文化人類学系だけにいわゆる東大系がいて。この研究会には東大というか、京大ではないのがいて、こう見ると、東大系の人たちは「自然制度」について一切触れていない。やはり。それは、いい、悪いではなくて、たまたまそうなるというので、自分たちの日頃接している近しさの、概念的近しさと人間的

近しさのゆえなのですが、そういうふうに考えていくと、やはりこの本自体のメタ制度的な、いろいろ考えるのは面白いかもしれない。もう少しうまく言った方がいいのだろう。これは、河合さんが親分なのだからしょうがないけれども、案外、言語が違うなということは、やはり最終、最後まで感じます。西井さんは、文化人類、社会人類だけれど、やはり京都出身だから、割とそういうことに近くなる。それは、学問的な内容よりも、やはりもっと違う、それこそ暗黙の近しさというのがある。これはメタ解説です。

（野村） 一つだけ。山極さんのお話の中で、他者への哀れみとかというような話が出ていたのだけれど、あれというのは集団の方から行かなくても、個人から出発するルソーにも哀れみ（pitie）というのが繰り返し出てきます。まだいろいろ考える余地があるのではないかと思います。

（山極） ちょっと一言だけすみません。哀れみという話でいえば、正当流の考え方は、相手に対して何か援助行動を起こすためには、相手が持っている知識と自分が持っている知識が違って、相手が困っているということが分からないといけないというのが本筋だったのです、それは、認知的にかなり高度にならなければ分からない、例えばサルだと分からない。つまり知識の差が分からないから、助けるという行動が出てこない。だけど、子育ての場合は、そんな話ではないのです。

だから、別の話で行けるというのが、今の要するにアザー・リガーデング・ビヘイビアが起こってくる話で立てられているのです。だから、その個人というのは前者の方だと思います。つまり個人というものの知性が確立して、相手と自分を相対化して考えられないとなかなかそれは出てこない。それは個人から行くのですが、そうではなくて、集団というかビヘイビアから行くのだったら認知は考えなくてもいいという話なのです。

（河合） 私から言わなければならないと思うのですが、ともかく今日のお話、コメント、そ

れから発表者の皆さま、ご報告者の皆さまもそうですが、これだけいろいろな話がこの本から出てきてしまったということにどうしたらいいのだろうという思いがありますが、名和さんから言われましたように、これは私がまとめなければならなかったことだったかもしれませんが、とても私の力では及ばないことで、取りあえずみんなで考えたことを書いてみようというところから、まず「集団」が始まり、その『集団』の本を出した後で、集団というものがある、そうである以上はそこに何らかの約束事があり集団であるということの意味があるのだろうということで、「制度」というテーマにしたわけなのです。それが、執筆者の中だけでもこれだけいろいろバラエティーに富んでしまった、ばらばらと言えばばらばらなのですが。ただ、そうした飛翔の場というものを常に考えていくことは必要なのではないかなと思っています。

もっとも、飛翔してしまっただけではいけませんので、これからまだ研究会も続きますし、考えてゆかねばならないと思っています。今日は本当にたくさんのコメント、ご質問を頂いたのですが、その一つ一つに時間的に全然答えられなかったので、これに関しては、これからまとめていく論集ですとか、それからこれからの研究会において何とか答えていけるように考えていきたいと思っています。

今日はどうも長い間ありがとうございました。ちょっとまとまりがなくて、また、タイムキーピングの方も私の拙い司会で時間をとてもオーバーしてしまって申し訳ございませんでした。今日は、それでは報告者の四人の皆さま、それからコメンテーターの名和さん、山極さん、野村さん、どうもありがとうございました。それから、どうも皆さんお集まりくださって、我慢強く聞いていただいたと思います。どうもありがとうございました（拍手）。

基幹研究「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」とは

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。また他方では、その対極にむかう方向性として、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、すなわちミクロ・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向を前に、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究を超えた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点において先導的な役割を担うことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の創生を企図するものである。

●研究主題のさらなる焦点化と先導化にむけて

―〈情動 affectus〉と〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる臨地・理論研究

（二〇一三年六月追記）

過去三年にわたる共同研究活動を通じ、本基幹研究では、ミクロ-マクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当

の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の様態に収斂するのではないかとの視座を得た。

情動とは、個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共在する身体が互いに影響しあうことで生み出される反響関係に焦点化するための概念である。その関係は、人と人の関係のみではなく、人やもの・環境など様々な関連性のプロセスを含む。主体やエージェンシーといった人間の意志を起点としてものごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとに巻き込まれていく受動性とそこから浮かび上がる生の現実を照射することを目指しているといえよう。それは、スピノザやドゥルーズに影響を受けた近年の情動論的転回（affective turn）、「身体性の人類学」、アクター・ネットワーク論などの動向とも共振する理論的方向性をもつものといえる。

複数的な情動の連鎖をつうじて、人びとの想像力に胚胎するモラルの次元にまで視野を展げてみよう。社会的なものは、これまで「市場外要素」のような消極的な価値づけを施されることも確かにあった。しかし、グローバル化（グローバル経済、グローバル内戦…）の今日、社会的なもののもつ創発的な価値が、経済的なもの、あるいは政治的なものとの対照において、人類学の分野でもひときわ光彩をはなつ主題として再浮上しつつあることは示唆的であろう。

今世紀に入り、人間の生が不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない。そうした時代状況のもとで、私たちは己れの生をなおも継続していかねばならない。これまで、人間の生をめぐる思考は、不確実性をそれ自体として見据えることなく、確かに実在しているように見えるものを拠りどころとして展開される傾向があった。しかし、不確実性を「リスク」と「チャンス」の計算式によって覆い隠したままでは、生の現在性に真摯に対峙する学的営為の芽は失われてしまうだろう。「感情と構造」のよう

な秩序志向の概念対立としてではなく、今日の世界各地で生じつつある未知の社会的胎動を感受するために、そして人類学の内部にいままた新たなアクチュアリティを回復させるために、情動と社会的なものの交叉する現場＝フィールドでの探究を、本基幹研究のさらなる先導的課題として、ここに明示する次第である。

【参考】

西井涼子『情動のエスノグラフィ』京都大学学術出版会、二〇一三年。
真島一郎「モース・エコロジック」『現代思想』三九（一六）、二〇一一年。
床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』京都大学学術出版会、二〇一一年。
三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ』弘文堂、二〇一二年。

カイエ、アラン『功利的理性批判―民主主義・贈与・共同体』以文社、二〇一一年。
菅原和孝『感情の猿＝人』弘文堂、二〇〇二。
デュピュイ、ジャン＝ピエール『ツナミの小形而上学』岩波書店、二〇一一年。
ロバーツ、マイケル「ナショナリスト研究における情動と人」『思想』八二三、一九九三年。

基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」
二〇一四年度、第二回公開シンポジウム
「『制度―人類社会の進化』
（河合香吏編　京都大学学術出版会、二〇一三）をめぐって」

編集・発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」
〒一八三―八五三四　東京都府中市朝日町三―一一―一
ＴＥＬ　〇四二―三三〇―五六〇〇
ＦＡＸ　〇四二―三三〇―五六一〇
ホームページ　http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/

発行：二〇一六年二月二二日

表紙デザイン：中村恭子

印刷・製本：株式会社ワードオン
〒三三五―〇〇〇四　埼玉県蕨市中央七―五六―三